フィリピン共和国

ミンドロ島遠征８７

報告書

横浜市立大学文化部連合会探検部
ミンドロ島探検隊

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大槻英二・・・　1
ミンドロ島民族分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
〔菊池　靖『フィリピンの社会人類学』より〕
隊員名簿，日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
フィリピン放浪記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・高梨洋之・・・　4
奥地をめざして・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大槻英二・・・２２
ドキュメント・三月十日
幻のバゴン族と接触！？・・・・・・・・・・大槻英二・・・２８
体位と民族・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田村康一・・・３４
ゴキブリの家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田村康一・・・３５
ミンドロ島の自然・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大沢啓志・・・３７
バタンガンの焼き畑で・・・・・・・・・・・・・・・・・大沢啓志・・・３７
ヤヤグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大沢啓志・・・３９
バボイ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４０
カラバオ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４１
ハガン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４２
ヒル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大沢啓志・・・４４
ふんどしをつけたアメリカ人・・・・・・・・・・・・・大槻英二・・・４５
ママ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４７
マハリ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４８
カフィヤオン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小嶋健太・・・４８
文明と地域文化の接点・・・・・・・・・・・・・・・・・大沢啓志・・・４９
ボンガボン川流域の民族分布・・・・・・・・・・・・・田村康一・・・５１
ボンガボン川流域民族分布図〔概念図〕・・・・・・・・・・・・・・・５５
旅の終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田村康一・・・５６
参考人献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７

― はじめに ―

「コケコッコー」と，鶏の鳴き声で，朝目を覚ます。服を着たまま川に飛び込んで，顔を洗う。薪を拾い集め，火をおこしてイモやバナナを蒸して食べる。午前中は，山へ行って畑を耕し，午後からは，涼しいニッパヤシの小屋で思う存分昼寝する。夕方は，火をかこんでギターラの素朴な音色を楽しみ，子供たちと戯れる。

南国のとある島の山奥にある，こんな素朴な暮らし。日本が経済大国になる過程で，どこかに置き忘れてしまった，自然と対話し，人間が主人公の村の生活。テレビや冷蔵庫や車のない生活を，人は貧しいときめつけるけれど，本当にそうだろうか。

彼らは自然，とりわけ森林からの恩恵をいっぱいにうけて，家も食べ物も道具も，すべて自分の手でこしらえる。私たちはといえば，カメラや腕時計やラジオなど，それはもう，彼らがびっくりするものばかり持っている。だけど，それらがいったん壊れてしまったら，私たちは自分の力でなおすことができない。所詮私たちは，文明社会の歯車の一つにすぎないことを思い知らされる。

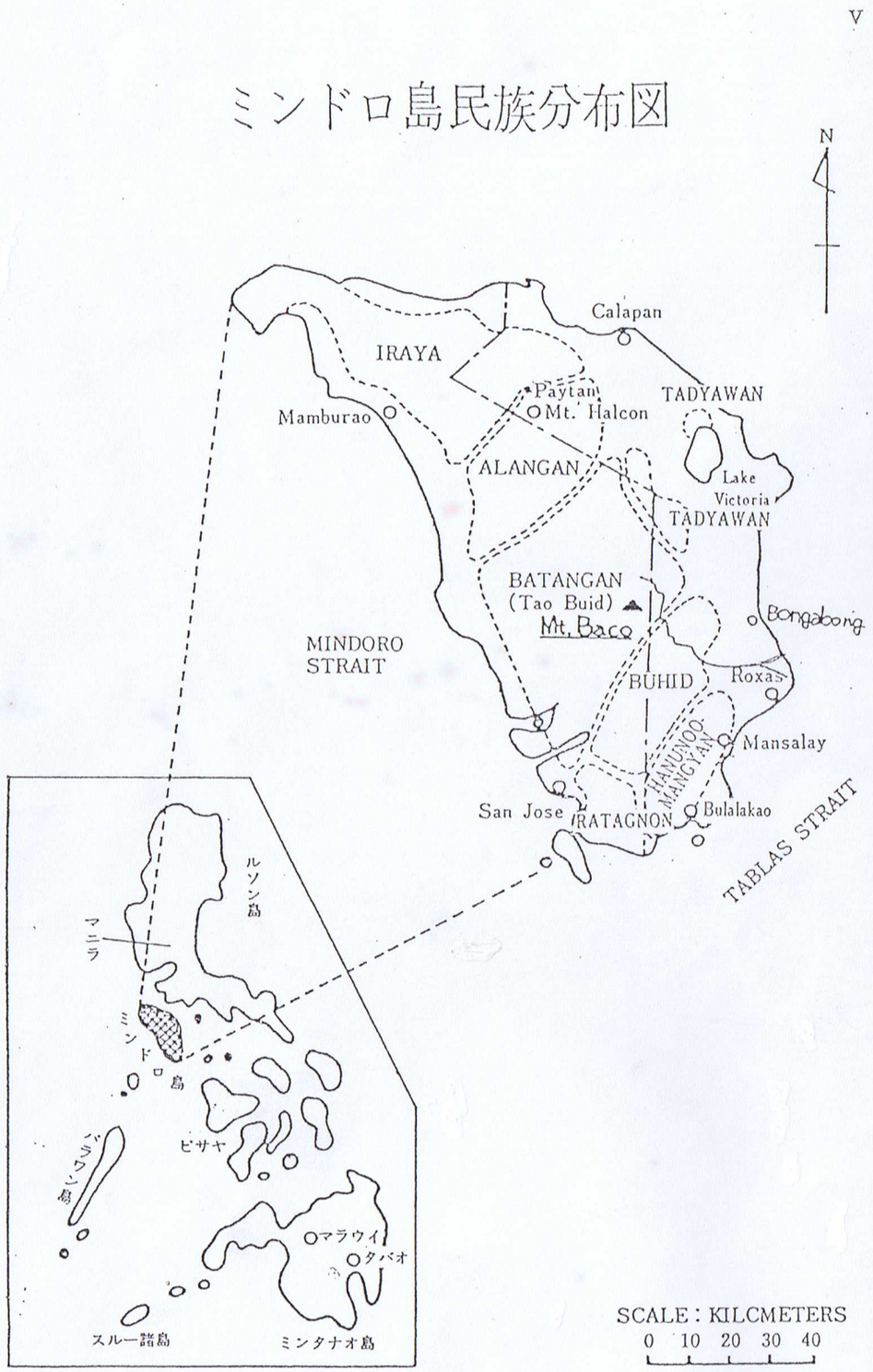
１９８７年2月２４日から4月７日までの六週間，私たちは，今なお文明を拒否し，伝統的な生活を守っていると噂されている「バゴン」という幻の種族を求めて，フィリピンのミンドロ島に渡った。この小冊子は，そのときの五人の隊員が体験した記録の，一断片である。

ジャーナリストでも，文化人類学者でも，宣教師でも，炎熱商人でもない，ごく平凡な大学生のみた，フィリピンの山奥の自然と人々の暮らし。「その探検の社会的意義はなんですか？」と尋ねられても，「社会的意義なんかないさ。ただ好奇心のおもむくままに，ロマンを求めて行くんだ」と，苦し紛れの歯の浮くようなセリフしかでてこない。

それぞれ，アルバイトやレジャーに忙しい合間に，書きなぐった作文集。ずいぶん乱雑で，ひとりよがりの文章ですが，どうかそこは大目にみて，最後まで読んでやってください。なお，同じ内容を複数の隊員が触れたりしていますが，ひとりずつ視点や解釈が微妙に異なって，おもしろいので，それはそのまま残しました。みなさんの心を少しでも動かし，共感や疑問を抱くところがあれば，このうえなく幸いです。

１９８７年１１月１日　大槻英二

ミンドロ島民族分布図



〔隊員名簿〕

隊長，渉外	大槻英二	文理学部文科国際関係論専攻三年
副隊長，装備	高梨洋之	商学部経済学科経済史学専攻三年
会計，食料	田村康一	文理学部文科教育学専攻三年
記録	小嶋健太	文理学部文科国際関係論専攻二年
医療	大沢啓志	文理学部理科生物学専攻二年

〔日程〕

2月24日　横浜 ——マニラ
25日　朝日新聞マニラ支局訪問
26日　国立博物館にて調査許可取得　マニラ ——カラパン
27日　ディバイン・ワード大学のマンヤンセンターを見学
28日　カラパン ——バタンガン（ブヒッド族集落）
3月　1日～3日　バタンガン
4日～6日　ホゴン・リゴマ
7日　ホゴン・リゴマ —— パンディングの家
8日～10日　ボンガボン川上流踏査
11日～13日　撤退　一時解散
14日　個人活動
大槻　アリット，ホゴン・リゴマ，ギニヤン
高梨　都合により帰国
田村　ホゴン・リゴマ，ギニヤン
小嶋　バタンガン，ホゴン・リゴマ
大沢　シャギ，ポコイ，ヤヤグ
29日　バタンガン集合，解散
30日～4月5日　フィリピン自由旅行（各自）
4月　6日　マニラ集合　国立博物館，朝日新聞社へ挨拶
7日　マニラ～横浜　探検隊解散

フィリピン放浪記　高梨洋之

1.フィリピンぎらい

自分はフィリピンが嫌いである。いい加減な国民性はもとより，なんといっても旅行者をだまそうとする根性が嫌いである。どこの国でも，海外からの旅行者はいいカモであるが，フィリピンでは特に気をつけていないと，身ぐるみはがされて，有り金ぜんぶをとられるという，泣くに泣けない事態も十分に起こり得る。だから東洋のニューヨークと呼ばれる首都マニラでは，落ち着いて観光することさえままならず，そうなるとそれこそ疑心暗鬼になって，まわりにいるフィリピン人すべてが盗人にみえてきて，おのずと貴重品を入れたディパックを持つ手に力が入るのである。すべてのフィリピン人が悪人ではないのであるが，何故かその新マレー系特有の顔立ちからそう見えてしまうのである。

自分が日本国内で得るフィリピン関係の情報も，フィリピンに対するイメージを悪くし，偏見を抱かせるようなものばかりである。風俗産業を担うじゃぱゆきさんや，暴力団の武器．麻薬の密輸，売春ツアー，度重なるクーデターや革命など，例をあげればきりがない。そういった訳で自分はフィリピンが嫌いなのであって，フィリピンへの遠征にあたっては，いささか食傷ぎみで，のり気がしていなかったというのが本音である。

しかし，そんな心とは裏腹に，今回の遠征をふりかえってみると，意外なほどに楽しいものであった。それは，自分がそれ以前に描いていた醜いフィリピン人のイメージとはかけ離れた，親切で，陽気で，純朴なフィリピン人に出会い，その人々とのふれあいによって，旅行のもつ奥ゆきが深まったことによるとおもう。

ただ自分は，完全にフィリピンが好きになった訳ではなく，未だにフィリピンぎらいの面がある。それはやはり，自分にはフィリピンが生理的に受け入れられないということによるとおもう。しかしながら，自分にとって食わず嫌いのような存在であったフィリピンで，約一ヵ月生活することによって，多少たりとも印象が変わったことは，あきらかなることであるとおもう。

2.いざフィリピンへ

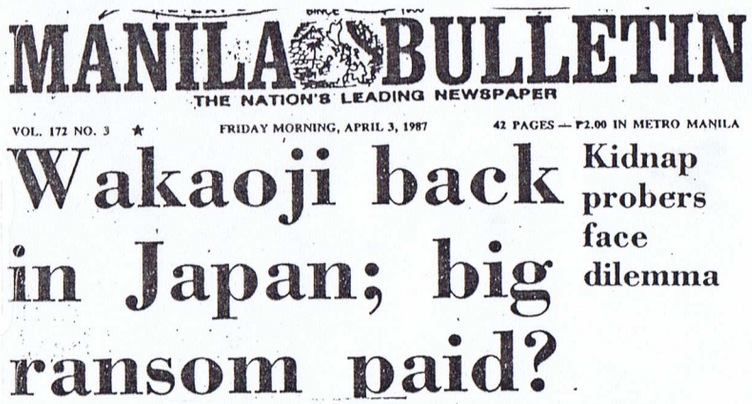
我々一行がフィリピンへ旅だったのは，外気が肌を裂くように冷たい二月の下旬であった。巷の人々は，コートやジャンパーなどを着こんでいるというのに，我々一行だけは，これから熱帯へ行くということで薄着であった。

探検部員は，本性的に面倒くさがりやばかりである。だから多少の寒さは我慢しても，荷物を減らそうとするのである。もっとも，帰国する前に衣料はむこうで買えばいいのであり，また帰って来るころは，多少暖かくなっているだろうと考えて，そうするのである。皆それぞれ勝手な服装をし，背中にはアタックザックを背負い，なにが入っているのかはしらないが，ザックは異様なほどにふくれあがっていた。

さて，学校を出発した我々は，京浜急行，都営地下鉄，京成線と乗り継いで，成田空港へとむかった。成田空港へ行くのは，初めてではないが，毎度のことながらあの警備の物々しさには驚かされる。多少はやめに着いたのだが，格好が格好だけにあまり歩きまわる気が起こらない。それでも退屈のあまり，見学場にあるヘリコプターにのりこんで，記念撮影をしたりして，修学旅行の生徒のようなばかげたことをして時間をつぶした。

出国手続きのあと，搭乗のためサテライトへむかうのであるが，その前に厳重な荷物検査とボディチェックがある。恥ずかしいはなしではあるが，昨年，ここで持っていた十徳ナイフが引っ掛かってしまい，取り上げられたのである。（もちろん，あとで返してもらったが）だから今年は，見つからないように気をつけた。

無事チェックも終わり，搭乗ロビーでしばらく待ったあと，飛行機に乗り込んだ。三十分ほどして離陸し，機は一路マニラへむかって飛んだ。三時間半後，真冬の日本から熱帯のフィリピンへと，環境は一変した。気温は夜七時でも三十度をこしており，南方へ来たという実感が，生暖かい外気を通じて感じられた。


MANILA BULLETIN
THE NATION'S LEADING NEWSPAPER
VOL. 172 NO. 3 ★ FRIDAY MORNING, APRIL 3, 1987 42 PAGES — ₱2.00 IN METRO MANILA
Wakaoji back in Japan; big ransom paid?
Kidnap probers face dilemma

「若王子氏帰国」を伝える現地紙。
私達が訪れた時はまだ行方不明だった。

3. フィリピン人をみたら・・・

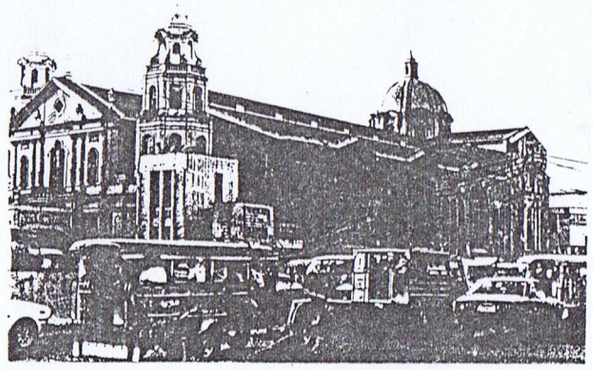
面倒な税関手続き，入国手続きのあと，タクシーを拾うために空港の外へでたとたん，怖い目付きをしたフィリピン人が怒とうの如く押しよせ，自分のタクシーに乗せようとする。ちょっとでも油断しようものならば，荷物を勝手にのせてしまう。乗る前に運賃を交渉し，適当な値に落ち着いたあとに乗り込む。そうしないと，法外な運賃を支払わされてしまうのである。

数度の交渉のあと，タクシーに乗るのではあるが，普通の中型車に荷物と五人を無理に押し込み，車内はまるでラッシュ時の電車のように，修羅場と化した。その状態のままで，ロハス大通りをものすごいスピードで走るのである。車窓からは，車の排ガスと南洋のなま暖かい夜風が浸入し，けばけばしいネオンサインが目に飛び込んでくる。

ホテルに着き，しばらく休んだあと夜のエルミタ地区へ繰り出した。道路の両側に，ゴーゴーバーと呼ばれる怪しげな店がたちならび，店の前を通るたびに，ポン引きや妙な格好の女性が声をかけてくる。そのような華やかな光景の影で，ぼろぼろの服をまとった子供たちが乞食をしている。しかもその子供たちは，人のポケットに探りを入れてくるのである。なにか嫌な気分になり，その場を早めに去りたくなった。

フィリピン人を見たら盗人と思え，というのがフィリピンを旅するうえで，肝に命じなければならないことであるようにおもう。確かに全てのフィリピン人が悪人ではないのであるが，悪人が多いことはいえるとおもう。だからといって，まるで悪人を見るような目付きで，または何かにおびえるような態度で接していては，真の意味でその国民を理解することは難しいのではないかとおもう。

残念ながら，自分はそのような接し方しかしていなかったようにおもう。しかしそれでもなお，自分はフィリピン人を見たら〇〇とおもえと考えるのである。



犯罪者が罪を犯したその足で
ざんげしていくというキアポ教会

4. ミンドロ島

ミンドロ島は，首都マニラのあるルソン島の南西に位置する，四国の1／2くらいの島である。島へは，マニラからバタンガスという港町までバスで二時間ほど乗り，そこから船で二時間半ぐらいゆられて着く。

島の中心地であるカラパンは，それまでのマニラの雰囲気とは違った田舎の町という感じで，そこに住む人々も純朴でいろいろと親切にしてくれた。ここにきてやっと緊張の糸がほぐれたという感じだった。町にはトライシクルとよばれるサイドカーのようなものが走りまわっていて活気に満ちているものの，夜になると通りは静まりかえり，ホテルにいても耳に入ってくるのは，傍らで回っている扇風機の音だけである。夜の町であるマニラからここへくると，その差が大きすぎて拍子抜けしてしまうほどである。

カラパンの町の郊外に，ツキビーチと呼ばれる海岸があり，そこで海水浴を楽しんだのだが，そこは日本の海水浴場とは異なり，ポリ容器やビンなどはおちておらず，海はどこまでもすみわたり，空は限りなく青く鮮やかであった。海があまりにもきれいなので，つい調子にのって自分でも呆れるほどはしゃぎまわってしまった。遥かに見える島影は，自分が南洋にいることを改めて感じさせた。夜にもなると，頭上の無数の星は，まるで絵のように美しく輝くのであった。

5. バスにゆられて

カラパンから少数民族の部落までは，バスで移動する。一応国道を通るのであるが，国道とは名ばかりで，舗装もしていない悪路である。にもかかわらず，ものすごいスピードでバスは走るのである。ちょっとでも気を緩めると，舌を噛んでしまうほど揺れる。車窓から見える風景はまたたく間に後ろへ流れ去り，また，侵入してくるすさまじい砂ぼこりは，あっという間に顔を真っ黒にするのである。

バスは時折り，小さな町ごとに止まり，その間に売り子がジュースやお菓子を乗客に売りにくる。かなりしつこく売ろうとするので，少々嫌気がさすものの，バスにいながらに買うことができるので，便利といえば便利である。売り子たちは，バスが動き始めると次々と降りるのであるが，かなり加速した後に降りる光景は，見ているほうがハラハラさせられるほど危なっかしい。

バスはけたたましくエンジン音をうならせて，山道を二時間ほど走り，目的地の少数民族の部落の近くの橋に着いた。オンボロバスは，排ガスを残して再び土煙をまきあげて走りさった。

6. バタンガン

バタンガンは少数民族の中心的部落であり，住民は五百名ほどいる。村のなかにはサリサリストアと呼ばれるよろず屋のようなものがあり，一部特権階級のたまり場となっている。部落の住民は人なつっこく，特に子供たちは，すぐにどこからともなく，次々に湧き出るように集まってくる。人々は自分たちがすることを一挙一動興味深く観察し，見られている側からすると，まるで動物園の猿になったような気分である。子供たちは純朴そのもので，日本の嫌なガキのようにすれていないところがかわいい。一応学校はあるのだが，ある程度の年齢の子供は労働力の担い手となるので，幼少の子供ばかりが通っている。ひまつぶしには子供たちをからかうのが一番で，それが少々度をこすと，対日感情を悪化させてしまうこともある。

村はヤシの実，バナナ，芋，とうもろこしなどの収穫によってなりたっているのだが，ロクタノンと呼ばれる低地民にかなり搾取されている。そのためか部落の人はロクタノンを嫌っている。しかしながら流通機構を彼らに握られているため，その搾取関係は不可避のようだ。また，部落には豚や鶏がかなりの数おり，付近の部落の供給地となっている。バタンガンは，他の少数民族の部落からみるとかなり文明化されており，物質的にも恵まれているといっていいとおもう。しかしそれは少数民族内での比較であって，ロクタノンなどとくらべると，やはり教育水準は低く，暮らしぶりも貧しいと言わざるをえない。

バタンガンの名物おじさん。イゴイ

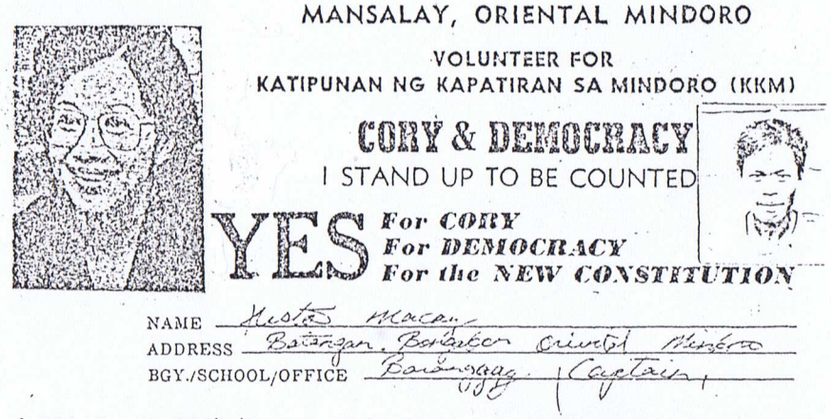
7. 部落のボス

この部落にはカピタンと呼ばれる指導者的立場のものがおり，バタンガンのカピタンは，ネストールという年齢にして二十五，六といった感の若い男であった。この男は一くせも二くせもありそうな奴で，その要領のよさは村一番であろう。彼の話しによると，以前，ミンダナオ島のサンボアンガ出身のスペイン人のメスチソ（混血）女性と同棲し，結婚しようとしたのだが，母親であるマカイの許しがおりず，結婚できなかったそうである。そして半ば家出といった感じでマニラへ出て，卵売り，中華料理人，警備員，タクシーの運転手などの職を経て，部落に戻り，現在の地位に落ち着いたそうである。やはり，かなり苦労をしたようで，彼が要領よくふるまうことができるということも納得できる。しかしながら，彼のように要領のよい人間がいなければ，人のいい原住民は搾取されるばかりであり，彼がカピタンであることによって，ロクタノンとある程度対等に渡りあっていることも，見逃すことはできない。

彼は非常に人を楽しませることが上手であり，彼の話術は人をひきつけるのである。まるでヒトラーといった感じの雄弁家でもある。彼をガイドとして雇ったのだが，彼の交渉のうまさがおおいに役立ち，食糧の調達などで幾度か助けられた。時々憎々しく思うこともあったが，やはり彼は部落にとって不可欠のようである。（因みに要領の悪い自分は，彼のようなタイプの人間は生理的に受け付けない）

8. さらに奥へ

今回の遠征の目的は，バコン族と呼ばれる未開民族との接触及びその生活の調査であった。そのためにはミンドロ島中央の山岳地帯へ行く必要があった。奥地へ足をふみいれるということは，危険がそれだけ増大するということでもあり，さまざまな危険が奥地に潜んでいることは必



ネストールが発行した通行手形。新憲法の国民投票の時のもの

至であった。特にＮＰＡ（Ｎｅｗ　Ｐｅｏｐｌｅ　Ａｒｍｙ，新人民軍）と呼ばれる共産ゲリラの存在には気を使った。彼らは武装して山岳地帯にたてこもり，そこの住民に共産主義を教授したり，生活指導などを行なっている。時折町の近くへ出没しては，ＰＣ（フィリピン国軍）と一戦交えている。自分らが滞在していた時期にも何度かこぜり合いがあり，死傷者が出たと言うことを耳にした。他の危険としては，毒蛇などの有害動植物の存在があった。特にコブラやキングコブラなどの毒蛇の宝庫であるジャングルへ足を踏み入れるのであるからそれなりの覚悟をもって行動した。少しでも蛇がいそうな気配を感じたら何時でも逃げられるようにし，出会わないことを祈るように薮の中を歩いた。又それほど危険でもないが気持ち悪い存在としてヒルがあった。そいつは普段は木の葉などにいるのだが，人や動物が近づくとここぞとばかりに降ってくるのである。そのため休憩のたびに首筋や腕などにヤツが付いていないかどうか確認しなくてはならなかった。又休憩している時でも，ちょっとでも油断していると靴の上を這っていたりしてゆっくり休憩もしていられなかった。何度かヒルに吸われたが，あまり痛みを感じないせいか傷が血だらけになって初めてわかるのであり，吸われている現場を目撃しても，しっかり吸着して離れずタバコの火で焼き殺してやっと剝がせるといった具合であった。そういう場合はたいていヒルの口が残ってしまい，そこが化膿してしまってなかなか治癒しなかった。

ともあれ自分らはバゴン族との接触を目的として奥へ進まねばならず，臆病で生来の怠け者である自分にとっては，そのことが精神的にも身体的にも苦痛となったことは確かである。

９．イモがごちそう

現地の生活が始まるとまず困るのが食生活のことであった。一応日本から味噌汁やふりかけ，レトルトカレーなどを持っていったのではあるが数に限りがあるため，必然的に現地の人と同じものを食べざるをえなくなる。それでは現地の人たちがどのようなものを食べているかというと殆どがイモ類かバナナであって，ごく稀に豚肉や鳥肉にありつけるといった感じである。

イモには大まかにいって，カモテ，ガビ，キャッサバの三種類があり，カモテは薩摩イモ，ガビは里イモのことで，日本と同様に煮るか蒸すかして食べる。キャッサバは日本では見られないが，煮て皮をむいて石臼などで餅のようについて食べる。いずれもまずくはないのだが，何日も食べ続けると腹にガスが溜まってくる感じがする。又バナナは日本のように黄色に熟してから食べるのではなく，青く固いものを蒸して塩などをつけて食べる。これにはさすがに慣れることはできず，食べてもせいぜい３～４本が限界であり，食べているときも何か喉に詰まる感じで，水がなければとても食べられるしろものではなかった。しかし飢えとは恐ろしいもので，食糧が欠乏してくるとイモでもバナナでもごちそうになるのである。御飯を食べるにしても，おかずがないのでふりかけだけや塩をふりかけて食べる事が殆どであった。

そんな状態であったので，頭の中を駆け巡っていたのはいつも食い物のことばかりで，言葉にだすことと言えば“日本に帰ったら○○を食うぞ”とか“腹一杯食いたい”とかそんなことばかりであった。食生活が悲惨な状態なので，重い荷物を背負って密林のなかを歩くのは苦痛以外のなにものでもなかった。一日中歩いて腹が減っても，米はもとよりイモさえも満足に食べることが出来ないこともあり，そういった意味では今回の遠征は飢餓との闘いでもあったのである。

１０．ホゴンリゴマ

ともあれ我々は万難を排して奥地への前進を始めたのである。手始めとして，バタンガンから手頃な距離にあるホゴンリゴマという部落へ駒を進めた。ホゴンリゴマは住民数二百名程の小さな集落であり，バタンガンと同様にバナナやイモを出荷して成り立っていた。そこに住んでいる住民はバタンガンの人達よりももっと純朴で，また英語が話せる人がいないため，現地語で話さなければならなかった。現地語は片言しか話せないので，身振り手振りのゼスチャーで日常会話をした。それでもなんとか通じるもので，それほど困ることはなかった。調査や遊びを通して，初め無愛想であった住民たちも次第に我々ににこやかな表情を向けてくれるようになった。

村の近くには，ボンガボン川というかなり大きな川が流れており，村人はそこで水浴をしたり，洗濯したり，魚を捕ったりしている。我々も何度か昼の暑い盛りにそこに行って水浴を楽しんだ。川にはかなり深いところがあり，最深部は２～３ｍはあったように思う。流れは急で，逆って泳ぐことはできず，ちょっとでも気を抜くと一気に下流に流されてしまうほどであった。河原で甲羅干しをしていると何とものんびりとしたゆったり気分になり，ついうとうとしてしまった。辺りの風景は日本のそれに似ていて，山腹に生えているバナナやヤシの木がなければ日本

のどこかの田舎と見間違うほどだった。ここにくると気持ちが安らぐように感じられたのはそのせいかもしれない。川で泳いだ後はきまって昼寝をした。村人から見れば，日本人はなんて怠け者なのだろうと思ったに違いない。

太陽が西に傾く頃になると山や畑へ行っていた村人たちが次第に戻ってき始める。我々もその頃夕食の準備にとりかかるのではあるが，いつのまにか村人が取り囲み，その様子をじっと見守っているのである。その機会に言語を採取したり，原住民の歌う唄を録音したりするのである。又村人との親睦を深めるために，我々自身も笛を吹いたり，唄をうたったりした。なんとか校歌を覚えてもらおうと試みたが，やはり駄目だった。

ホゴンリゴマでの調査で分かったことは，そこの言葉がバタンガンの言葉と比較してＨ音が抜けるということだった。例えば，バタンガンでは「わたし」はａｈｏであるが，ホゴンリゴマではａｏとなるのである。さしずめバタンガンの言葉が標準語で，ホゴンリゴマの言葉はなまりのようなものだろう。その他家族構成や親族関係などについても調査したが，かなり複雑でややこしかった。小さな集落なので全体が家族的関係にあるようで，その中の親族系統は大きく４ないし５つに分けられるようであった。

村人は日本の食生活に興味を示し，食事時になるとどこからともなく現れ，我々の食事風景を小さな窓から覗き込んでいた。我々は持参した味噌汁や梅干し，ふりかけ，かんぱんなどをわけあたえた。かんぱんなどは結構気にいったようであるが，味噌汁や梅干しなどはあまり好まれなかった。特に味噌汁については，七味唐辛子をたっぷり入れたものを子供に与えたりしていじわるしたせいもあって嫌がられていたようである。（そのいじわるのせいで自分は，その後“いじわるな目の小さい日本人”と呼ばれるようになった）

１１．キッコー

ホゴンリゴマにはキッコーという妙なアメリカ人が住んでいた。彼はいまではあまり見られなくなったオリジナル・マンヤン・スタイル，つまりＧストリング（ふんどしのようなもの）で生活しており，その日々の暮らしも原住民と全く同じで，山に自分の畑を持ちそこを耕してイモやトウモロコシなどを作っているのである。その奇妙ないでたちと行動はかなり有名であり，一度話しを聞いてみたいと思っていたところ，たまたま運よく彼と話す機会が滞在中にもてた。

彼の話しによると，彼の本名はフランシス＝フィッシャーと言い，キッコーという名はタカログ語を習う際に先生から貰ったニックネームだそうである。彼はニューヨーク市立大学を卒業したあと普通に就職したそうだが，二年程勤めた後に辞めてしまい，海外援助のボランティア団体に入ってフィリピンにきたのである。ボランティアの期間は既に過ぎてしまったのだが，自分の希望で残っているということであった。何故そのような格好でいるのかと尋ねると，この方が山で作業し易いし，生活にも便利だと答えた。又こんなところで暮らしていてアメリカが恋しくならないかと聞くと，別に恋しくはならないが一応半年にいっぺんはニューヨークに帰っているということだった。これからの自分らの計画について話すと，彼は興味深げに聞いた後にそれは大変困難になるだろうが，いい運動になるだろうと冗談まじりに答えてくれた。彼は山にいる危険な動物などについてもいろいろアドバイスをしてくれ，コブラが鎌首を上げると１ｍくらいになることや，Ｌａｎｇｇａｍというヤスデの一種に猛毒があることなどを教えてくれた。

彼は前述のバタンガンのカピタンのネストールを忌み嫌っているようで，彼の事について尋ねてもろくな答えが返ってこない。彼によるとネストールは村人には支持されておらず，ただ単に市長と仲がいいというだけでカピタンになった，いうなれば名目上のカピタンであり，実質的に支持を得ているのは前任のカピタンということであった。カピタンの選出方法は各部落で多少異なるが，大部分の村は話し合いで決め，その決定基準としては，人格や知識の豊富さなどがあるそうである。

彼はママ呼ばれる嗜好品の一種を愛用しているため口が赤く染まっている。そのママというのは噛みタバコのようなもので，一種の覚醒作用があり，試した者の話しではたいそう苦いものだそうだ。彼は既に慣れ，ニューヨークへ帰るときにも持ち帰るほどやみつきになっているということだった。マンヤン族でも現在ではＧストリングをはいたり，ママをやるものは少なくなっている。そういった意味では，皮肉にも，アメリカ人の彼がオリジナルのマンヤンよりもマンヤンらしい人物なのかもしれない。僅かな時間ではあったがキッコーと話してみて，彼がその奇抜な風貌や行動からは想像できぬほど気さくでユーモアに富んだ親切な人物であることがわかった。同時にそこまで少数民族と生活をともにする彼の生き方に脱帽し，はたから見ると滑稽そのものの彼の生活がなんとも偉大で奥の深いもののように感じられた。原住民は彼を少なからず尊

敬し，彼自身も原住民のよき相談役となり，貧しい生活をしている少数民族とともにその生活改善に努力しているようであった。

１２．バゴン族を追って

バタンガンの人によると，ホゴンリゴマにも我々の求めるバゴン族はいるとのことであったが，ホゴンリゴマの住民によるとバゴン族はもっと山奥にいる野蛮人とのことであった。かくして我々はホゴンリゴマをあとにして更に奥地へ向かうことにした。家を間借りしてお世話になったガイノさんに心ばかりのお礼の品を残してホゴンリゴマを出発。だらだらと続くボンガボン川の氾濫平原を黙々と歩いた。まだ朝の九時前だというのに，太陽の陽ざしは容赦なく照りつけ，腕や首筋をジリジリ焼き焦がす。背負っている荷物が肩にくいこみ，手がしびれてくる。胸が苦しく，肩は切れるように痛く，頭は暑さでボーっとしてきた。休憩になると，あたりかまわずザックをほうりだして横になった。さっきまでちっとも進まなかった時計の針は，ここにきて一気に進んだ。

休憩の時間はあっという間に過ぎ去り，再び前進を始めた。暑さのせいで，遠くの風景が陽炎のようにゆらゆらと揺れている。氾濫平原はどこまでも果てしなく目の前に広がり，そのなかで動いているのは，自分らだけのように感じられた。

休憩から休憩までの時間が，だんだん長くなるような錯覚に陥いる。ガイド役であるネストールが何かと物を言ったり，話しかけてくるのが煩わしくて仕方がなく，しまいには元気な奴がしゃくに思えてきた。頭がじんじんし，頑張れ，もう少しと自分自身に言い聞かせた。

お昼近くになって，やっと氾濫平原の末端にたどりついた。そこには最後のサリサリストア（よろず屋，雑貨屋）があった。店といっても商品はほとんどなく，閑古鳥が鳴いていそうだった。ここで昼食をとることにし，ネストールに頼んで昼食の用意をしてもらった。ガビと呼ばれる里芋を食べるだけであった。芋につける汁はキムチの残り汁のように猛烈に辛かったが，辛いもの好きの自分にとっては，美味しく，食欲をそそるものだった。

食後しばらく休憩をとり，再び前進した。あたりの風景はすっかり様がわりし，まるで日本の渓谷のようになってきた。大きな岩の上を越したり，石のごろごろした川原を歩きつづけた。いくどか危ない所があったが，なんとか無事に前進することができた。道らしい道はすでになかった。途中川で魚をとっている少数民族の集団にであったが，なかなか寄り付かず，ひとところに集まって，まるで魔物でも見るようにこちらの様子を窺っていた。しかし，こちらが微笑みかけると相手もその固い表情を緩めた。彼らは手製の水中メガネと水中銃のようなものを持っており，それで川魚を捕らえていた。

さらに上流に行くと，一組の男女が水浴びをしており，我々を見つけると逃げようとした。しかし，ネストールが呼ぶと男の方が近寄ってきた。彼はまだ若く，十七歳くらいのように思われた。彼もやはり，水中メガネと水中銃を持っていた。彼はネストールと二言三言会話を交わした後，彼女のところへ戻っていった。彼らの家は浮浪者の家のように簡単な三角屋根だけだったが，それなりに幸せそうであった。

黄昏ちかくになって，やっと家を見つけた。その家は山奥にあるとは思われぬほど立派な家であり，柱も太く，かなり頑丈そうであった。また，床がそれまでの家と比較してかなり高く，登るのに苦労した。今夜はこの家に泊まることにしたが，家の持ち主がいなかったので，その人を捜しにでかけた。近くの山はカイギン（山焼き）の準備のため，木々が切り倒され，すっかり見通しがきくようになっていた。ネストールは山腹に人を見たらしく，盛んに大声で呼び掛けていたが，返事はなく，逃げられたようであった。マンヤンの長であることを豪語していた彼の力も，このようなへんぴな山奥では効力をしめさないようだった。彼が現地語で呼び掛けていた言葉を日本語に置き換えると，次のようになると思われる。

「俺はマンヤンのキャプテンのネストールだあ」

「家をかしてくれ」

「食糧（芋，バナナ）をくれ」

日頃の彼からは考えつかぬ程情けない姿であった。結局我々は家の持ち主に会えず，仕方なく無断で泊まることにした。

１３．小高山

翌日，自分と小嶋は家から見える大きな山を目指して登ることにした。他の隊員はこれから先を偵察するということであった。朝食の後少し休憩し，十時に出発した。昨日とは異なってディパック一つであったため，足どりは軽かった。初めバナナ林のなかを進み，途中幾度か，いかにもなにかが潜んでいそうなジャングルのなかを突き進んだ。時折バナナの木が腐っているものを踏んでは，その不気味な感触に気持ちを悪くした。ジャングルのなかを進むときは，どうか毒蛇にあいませんようにと，祈

るような気持ちで手足を進めた。道のようなものが一応あるが，かなり荒れており，途中何度かジャングルのなかをさまよった。

ガレ場を登ったところで，やっと稜線にたどりついた。そこで人影を見たのであるが，あっという間に逃げてしまった。そこからは比較的歩きやすい道であったが，太陽が真上にあるせいか，身を焦がすように無情に自分たちを照らしていた。まるで日本の夏山のようで，暑さに弱い自分は本当に難儀した。しかも一度焼いた山らしく，山肌には，膝ぐらいの丈の，日本でいうカヤのような草が群生しており，歩きやすいのだが，そのために太陽光線の照り返しが激しく，より一層自分を苦しめた。頂上は見えるのではあるが，あとすこしというところでなかなか着くことができない。汗が体じゅうから吹き出し，まるで滝のように顔から流れ落ちていた。ふと後ろを振り返ると小嶋も自分と同様に暑さにあえぎながら登っていた。二人ともまるでスローモーションのような歩き方にいつのまにかなっており，夢遊病患者のようにふらふらと頂上を目指して歩いていた。足どりは重く，体がまるで言うことを聞いてくれなかった。頂上に着いたときは二人とも疲労しきっており，オールアウトといった感じで倒れるように仰向けになった。空はコバルトブルーに晴れ上がっており，それとは対照的に頂上付近は焼畑の跡に緑がまぶしいくらいに新芽が覆っていた。一息ついた後，記念撮影をし，バナナとトウモロコシの昼食をとった。眺望はすばらしく，３６０度の大パノラマが展開していた。二人で冗談まじりにこの山を小嶋の小と高梨の高をとって小高山と名付けることにした。燕が時折恐ろしく速い勢いで自分らの横をかすめて飛んでいた。位置を確認するため，山の位置と方位を記録した。標高は高度計によるとおよそ１０１０ｍであった。その後しばらく雑談し，一気に下山した。登る時の苦労が嘘のように下りは楽であり，足どりも軽やかであった。下山してから再びやまを仰ぎ見て，こんな暑い国でよくあんな所まで登ったものだと我ながら呆れかえってしまった。（後にその山の名がＨａｇａｎということがわかった）

遥かなるバコ山をめざして

１４．バゴン族はいずこ

前日の疲れがとれないまま，我々は翌朝更に前進することにした。しかしながらガイドであるネストールはそれより先の地理についてはわからないといった。仕方なしにもう一人ガイドを雇い，出発した。間もなくして，危なっかしい丸木橋を渡ったのだが，朽ちかけていつ壊れてもおかしくないしろものであった。高さはそれほどでもないのだが，下を見るとボンガボン川が白い泡をもうもうとたてて凄まじい勢いで流れていた。橋を慎重に渡り，ほっとしたのもつかの間，今度はいきなり急な登りとなった。こちらの人は，まわり道というものをあまり造らないので，どんな角度であろうと，道はまっすぐのびている。木に掴まりながらでなければ，とても登ることはできず，気を緩めるとズルズルと転げ落ちそうであった。なんとか登りきると，今度は急な下りとなった。幾度か道から足を踏みはずしそうになったりしたが，かろうじて無事に下に下りることができた。川の水量は依然として減らず，ごうごうとすさまじい音をたてて流れていた。川のほとりで休憩をし，そこでバナナの昼食をとった。川へ入って泳ごうとしたが，流れがあまりに速く，泳ぐことはできなかった。

その後は河原を歩いたのだが，石がごろごろしているせいで，足をひねったり，くじきそうになった。他の者もかなり歩きづらそうで，つまづいたり，転んだりしていた。ガイドの二人は素足で歩いているため，ホイホイと行ってしまい，ついていくのにひと苦労だった。

小一時間歩くと比較的大きな橋が見え，そのたもとで人が焚き火をしているのがわかった。橋は蔓と竹でできているのだが，見た目ほどきゃしゃなものではなく，渡ってみるとかなり頑丈であった。それでもやはり人が渡ると結構揺れ，下に流れる川を見ると，恐ろしさのあまり思わずたちすくみそうであった。焚き火をしているのは，バゴン族らしき男とタウブイッド族の男であった。タウブイッド族は，自分らの追跡しているバゴン族とは言語，習慣などについて異なる民族である。タウブイッド族のその男は，耳に安全ピンを刺してイヤリングのようにしていた。（後に遇った他のタウブイッド族もやはり，同じ様に耳たぶに安全ピンを刺していた）

バゴン族の特徴は，パイプ喫煙の習慣があること，ネズミを食べる習慣があること，そして体が汚いことなどがあげられる。その定義からすると，もう一人の男はバゴン族であった。本人に「お前はバゴンか？」と尋ねると，笑いながらそうだと認めた。しかし何かふにおちない点が

あり，すっきりとしていなかった。ほんとうのバゴン族ならば，話によると逃げてしまうはずであるからである。少し話をした後，彼らと別れて更に上流へ向かった。しばらく行くと，岩の上に人が１０数人集まり焚き火をしていた。彼らは老若男女を問わず皆パイプを口にしていた。また年端もいかない子供まででである。我々が近づいてくるのに気づくと，女の子たちは岩の陰にさっと隠れてしまい，顔を絶対見せようとしない。それとは対照的に男達は堂々としており，我々をもの珍しそうに眺めていた。彼らは以前見た人と同様，水中銃と水中メガネをもっており，魚を捕って生活をしている感じであった。

ビー玉を差し出すと顔をほころばせて，先を争うようにそれを受け取った。彼らが吸っているパイプを吸わせてもらったが，それほどきついものではなかった。パイプはよく見ると，粘土でできているようで，吸い口のところは竹であった。

少し目を離したすきに，女の子たちはどこかに逃げてしまい，男たちだけがそこに残った。彼らもやがてどこかへ行ってしまい，我々だけがぽつんと残った。既に陽は西に落ちており，仕方なしにその場で野営することにした。

幸か不幸かちょうどその日が田村君の二十歳の誕生日であった。そこで我々は彼のために，ケーキと紅茶でささやかなパーティーをすることにした。ケーキは，その場にあった小麦粉と砂糖で作った，蒸しパンのようなものであったが，飢えているせいか，大変美味しいもののように思えた。

野営は初めてではないが，天井がないところで寝るというのは変な感じがする。しかし星空を眺めながら寝るというのも，なかなかよいものである。ただ雨が降らないことを祈りながら床に就いた。寝ながら，バゴン族は一体何処に住み，どんな生活をしているのだろうという疑問が湧き起こり，同時に我々は彼らに本当に会えるのだろうかと心配になった。

カメラをむけたら岩陰に身を潜めてしまった女たち

１５．ミンドロ島の秘境“マスボ”

翌朝，河原の石に寝たせいか，背中や手足が痛かった。昨晩は暑苦しいのと，石にあたる痛さであまりよく眠れなかった。ここ数日，熟睡した日がなく，起きても頭がボーッとしてはっきりしていない。それでも１時間ほどすると頭がなんとか働くようになった。

今日も再び前進を開始する。両側が切りたった岩の横をトラバースするなど，かなり危険な箇所もあり，緊張の連続であった。また石濡れている所などは，ツルツルと滑り，気を緩めることはできなかった。２時間ほど行ったところで，重い荷をもって前進するのは危険ということで，携帯食料・貴重品・寝袋だけを持って空身で進むことにした。軽装になったので，ペースは一段と速くなり，沢登りのように軽快に前進することができた。

晴れているのに雨がしとしと降るという，妙な天気であった。恐らくこの辺りは，川の源流ということもあって，年中このような天気なのであろう。ボンガボン川の水量が豊富なわけが，ここに来てやっとわかった気がした。

濡れた石に滑り足を打ちながらも，なんとか最終目的地であるマスボというところに到着した。ガイドの話によるとここにバゴン族が棲息しているとのことであったが，人が住んでいる気配は感じることはできず，少々気落ちした。辺りはＶ字谷のような地形で，両側に山が迫っていた。

休憩の後，現在位置確認のため南側の小高いピークに登ることにした。登り始めると，見た目より遥かに登りにくいことがわかった。岩がゴツゴツ露出している上に，脆く，いつ崩れてもおかしくなかった。何度か落石してひやっとさせられたが，なんとか無事に頂上に立つことができた。それでも手や腕は，かやのような植物によって傷だらけになっていた。頂上からの眺望は，決して良いものではなく，殆ど見渡すことは，できなかった。かろうじて見える地形を地図と照合して，現在位置を確認し，早々と下った。

せっかくここまで来て，なにもしないのは残念だということで，自分と小嶋を除く３人は，そこに残ってバゴン族を捜すことにした。携帯食糧を彼らに渡し，ガイド２人と自分らは，荷を残した所へ戻った。夕刻であったので，川の水温は低く，凍えてしまいそうだった。戻ってから荷の整理をしていると，ネストールがバゴン族がいるから来いと言うので行ってみると，耳たぶに安全ピンをした一群が河原でたむろしていた。恐らくタウブイッド族であろうと思ったが，念のため挨拶をした。しか

し返事はなく，通じていないようであった。よくわからないので，一応写真を撮り，その場を去った。

残してきた３人が気掛かりであったが，自分自身疲れていたので，早めに床に就いた。月が明るい夜で，時計の文字盤が読めるほどだった。

翌朝１０時頃，３人が無事戻ってきた。彼らの話よると，１時間登ったところで大きな家を見つけたそうで，そこには髭面の男とその妻らしき女がいたということだった。女はすぐに逃げてしまったが，男の方は，片手にボロ（蛮刀）もう一方に斧といういでたちで仁王立ちし，わけのわからない言葉を叫び，やがて逃げてしまったそうである。また家の周りには，鼠を捕るような仕掛けがしてあったそうである。どうやらその男女こそが本物のバゴン族であったようだ。逃げられてしまったものの，バゴン族に遭遇したことは，当初の目的が果たせたということで，喜ばしいことであった。自分自身は，直接的には接触することはできなかったが，遠征の目的が達成できて何よりも嬉しかった。ただ確証がとれなかったので，バゴン族は未だ知られざる民族である。

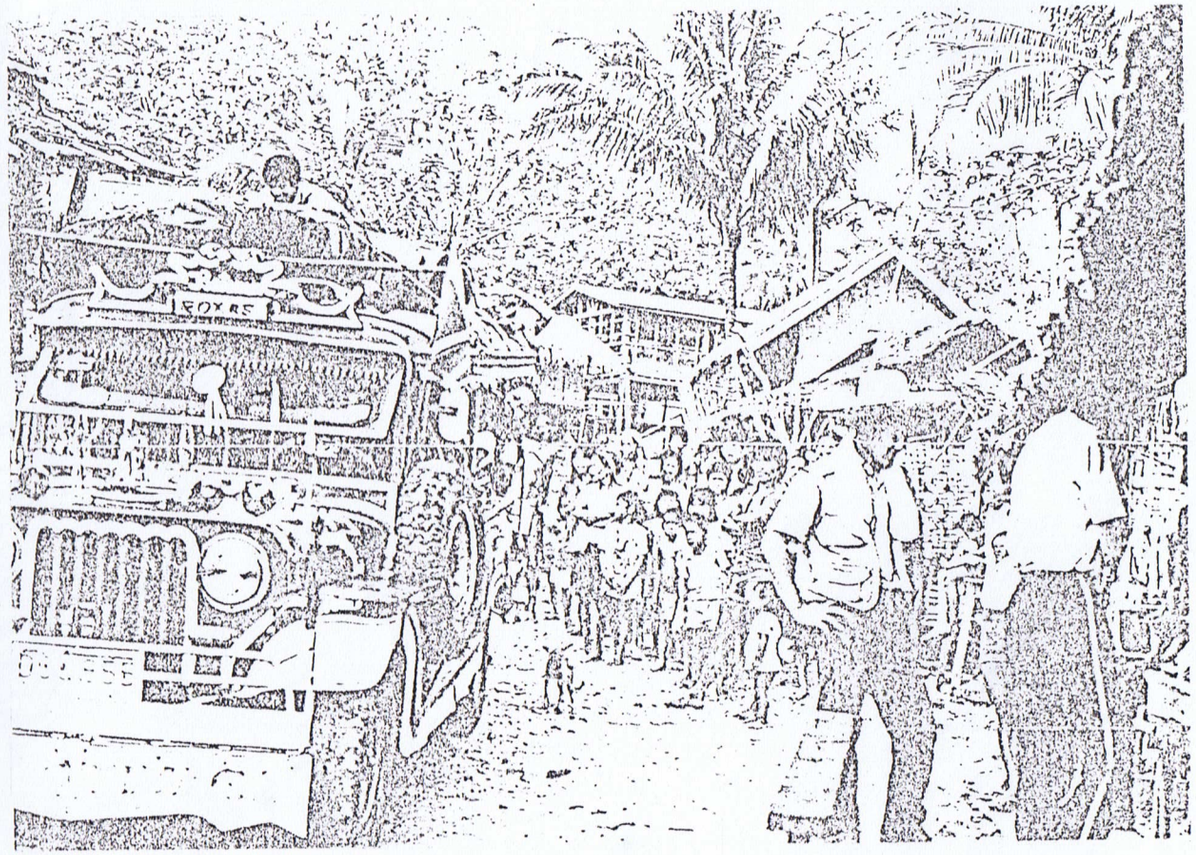
１６．旅を終えて

一応マスボを最終到達地点として，今回の遠征を終えて引き返した。遠征の自己目的であったバコ山登頂は，惜しくも様々な障害によって達成することはできなかったが，他の４人の隊員とともに過ごした１０日余りは自分にとってかけがいのない日々とすることができた。南方の強い太陽光線によって，黒く焼き付けられた顔や首筋・腕は，自分がミンドロ島を探検したことの証しであった。

旅は決して楽なものではなかった。肩に噛み付くように重いザック，焼き焦がさんばかりに照りつける太陽，侵入者を拒むジャングルやそこに生息する動植物など，我々の前進を阻む要素は数知れなかった。しかし，そのような障害があったからこそ，この遠征を終えたときの充実感が大きかったのではないだろうか。

普通に生活をしている人の目には，我々の行為は，わざわざ危険に飛び込む愚かなものとしか映らないであろうし，何のメリットもないものだという批判もでるであろう。金と時間を弄んでいる学生のくだらない道楽だという人もきっといることでしょう。自分もあえてそれを否定はしません。しかし，普通の生活をしていては味わえない，非日常生活をしたことは，自分にとって大変有意義なことのように思われるのです。自分とは生活・習慣など様々な面で異なる人たちと，暮らしをともにすることは，それが短期間であったにせよ，とても貴重な体験となったであろうし，その後の自分の生活にとっても，多少たりとも影響を与えるに違いないと思う。

最後に，この遠征を遂行するにあたって，精力的に計画を推進した，大槻君並びに田村君，重い荷を持ちながらもよく活動してくれた小嶋，大沢，そして朝日新聞社の方，ＯＢの方々，その他関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。



探検隊を見送るバタンガンの村人たち

奥地をめざして　大槻英二

昨年の失敗（’８６春・第二次ミンドロ島遠征）は，強引に奥地に足を踏みいれなかったことにあった。「山は共産ゲリラがいて危ないし，川も急流で深くて渡れない。」と，実は自分が行くのが嫌なだけの案内人の言葉に惑わされて，ただバタンガンの周囲に散在するかわりばえのしない十余りの村落を巡回するにとどまった。昨年，一隊員として味わった失敗の上に，今度は自ら隊長となった本計画が練り上げられた。

基本方針は次の四つ。

1，奥地探検主義

誰が何と言おうと，ジャングルがあろうと，とにかく，日数をたっぷりとって奥地に突っ込むこと。そこにこそ，「若さ」と「暇」にまかせた学生探検の本分がある。

2．現地密着生活主義

テントや携帯用燃料，レトルト食品などにできるだけ手をつけない。ジャングルといえども，そこには，人間が住んでいる。彼らの家に居候し，彼らと同じものを食べる。できれば洋服脱ぎ捨てて，ふんどしいっちょうで飛びまわるのが理想と思う。フィールドワークの知識も技術も至らない私たちは，とにかく体験して，感性に訴えるしかない。

3．現地解散主義

究極的には，探検は自分一人の力でやるもの。この考えは，初め部全体でやる予定の本計画に脱落者が一人二人と出て，一時は部長の田村までやる気をなくしたとき，「たとえ，俺一人になっても，この計画を探検部の名の下で実行しよう。」と決意させて，山積みの渉外活動に駆けずり回らせた。

そして現地では，奥地探検の一週間を除いて，一村一人の原則で，各村落に定着した。この方が実際，必要に迫られて，現地語の上達が速く，滞在地の経済的負担も軽くなり，大変有効であった。計画終了後も各自，フィリピンで，小旅行を楽しんで帰国した。日本人は，グループで旅行すると，ロクに現地の人と話もせずに凝り固まって，現地の悪口をこぼしがちだ。

4．仕事の分担

「探検は一人でやるもの」という考え方に逆説的であるが，ある程度，責任を任されないと，その組織の活動に，本気に取り組まないという自分の性格を考え，みんなもそうであると思って挙げた。

渉外・医療・装備といった従来の分け方に加えて，準備段階で，毎週の部会の後，「ミンドロ島研究会」を開いて，様々な角度からレポートを発表しあって，情報交換の場とした。

現地では，言語を中心に採集する者，写真を撮る者，食料を中心に調べる者など関心に従って，自然と分化した。

そして，作戦は次のようにたてた。一番山奥に，「木の皮のふんどしを着けた未開な民族」バゴン族が住んでいて，中腹にバゴン族とブヒッド族の混血民族（メスティーソ）が，そして街に近い所にブヒッド族が住んでいると思われる。ミンドロ島中部山岳地帯で最も高い山は，バコ山（２４８８ｍ），そこから流れ出ているのが，ボンガボン川という島で一番大きな川。その川の中流域の支流ごとに，一つずつ村が散在していることは，昨年までの調査でわかっている。文明との接触を拒むというバゴン族も恐らく，ブヒッド，メスティーソと中継して，交易していると考えられる。その川筋の交易ルートを下流から上流へ行けるところまで遡って，バコ山にとっついて頂上を目指せば，一番奥の部落があるはずである。たとえバゴン族と接触できなくとも，バコ山に登頂したということで良しとしようとした。

うっそうとしげるジャングルをゆく

厳しい現実

しかし，そんな机上の計算通りに，コトは運ばない。当然，現場へ行けば，様々なハプニングに遭遇する。また，そこに探検の面白さが潜んでいる。一から十まですべて結果がわかっていたら，わざわざ私たちはジャングルの薮を漕ぐ必要はないのである。「バゴン族との接触」という目的と，「ボンガボン川を遡って，バコ山を目指す」という作戦は，あくまでタテマエであって，この先なにが起こるかわからない，出たとこ勝負だからこそ，それに挑戦するのである。

まずは，バタンガンでのガイド探しに四苦八苦した。いくら，強引に奥地へつきすすむといっても，道先案内，通訳，食料調達，有毒な動植物への対処など，ガイドなしでは，あまりに無謀だ。しかし，村人たちは，家族友人に囲まれ，楽しくのんびりとした村の生活をこよなく愛している。また，隣のホゴンリゴマ村より先へ行った経験のある者も少ない。中継交易の行われている証拠でもある。それならば，ガイドもリレーで行えばよい。それにしても，英語が多少たりとも通じるのは，この村の住民だけであるから何としてもここで，ガイドを獲得しなければならなかった。有力候補の，村一番のインテリ，サイナ（３５歳）は，「心臓が弱くてドクターストップがかかっているし，水牛を使って畑を耕さなければならない。」と，丁重にお断りされた。昨年，案内してくれたバギタン（十八歳）は，「もうすぐ卒業で試験勉強が忙しい。」と，ハチャメチャな英語で返事が返ってきた。残るは，ネストール（二十六歳，年齢は三人とも推定）。彼はバタンガン村の新人類。ブビッド族のリーダーだと自称する彼は，低地フィリピン人（タガログ族など）の小学校を卒業し，何度も家出してマニラに渡り，中華料理店の皿洗い，タクシードライバー，卵売りなど，職を転々とかえ，サンボアンガのスペイン系，マンサライのハヌノオ・マンヤン族，そしてバタンガンのブヒッド族と，女性遍歴も激しい。低地入植者との土地紛争など，伝統的な慣習法では解決できなくなってきた昨今，外界での人生経験が豊富で，町の有力者にコネのある彼のような人材が必要とされつつある。とはいえ，ふんどしをつけ，ママ（伝統的な嗜好品）をくわえた伝統的スタイルを守る老人を指差して，「オリジナル，マンヤン」と，嘲うことはないと思うが．．．。（マニラには，ママを血に，ふんどしをしっぽと勘違いし，ミンドロ島の山岳地帯には，マンヤンというしっぽをはやした吸血鬼が住んでいると本気で信じて，蔑視している人もいる）。全く，ネストールは，ブヒッド族の文化変容の生きた化石のような男だ。こんな男だから，ガイド料もタバコや米では済まされない。もっとも大事なものはカネだということを，よーくご存じだ。経済大国ニッポンからやってきた我々にとって，彼の要求額に応じるのはおやすい御用だ。しかし，そうしては，彼は一層つけあがって，後々訪れる人のためにもよくない。この交渉は，仲介してくれたサイナが，うんざりするほど難航した。結局，フィリピン労働者の平均賃金で最初の十日間だけ雇い，私たちが彼の働きに満足すれば，さらにボーナスを出すということでまとまった。しかし彼は，日当いくらよりも，要するに案内していくらなのかと，全額前払いを要求してきた。昨年の経験から彼の言動は予想できたので，前払いならボーナスはなしだ，と強気にでた。あまりに激しく対処する自分と，いじけるネストールを見るに見かねた田村君が，「そろそろ折れてやれ」と，タオルを投げた。最初の四日分は前払い，あとの六日分は後払いで，先に帰国する高梨君が，無事，バタンガンに戻ってきたら，ボーナスを払うことにした。「カネ，コネ，学歴」の日本社会を離れ，こんなフィリピンの山奥の少数民族の部落に入って，純粋な心に触れられるかと思ったらこの始末。かなり憂鬱な気分になった。しかし，彼の方が，私より人間の器が大きかった。得意のジョークと歌で，私たちと村人の心をなごませる，アフターケアを怠らない。

奥地の情報収集をするガイドのネストール

のど自慢大会

奥地探検への旅立ち

ガイドが決まったところで，すぐにバタンガンを出発。ジープニー，バス，水牛と乗りついで，ボンガボン川を徒渉した氾濫平原に，ホゴン・リゴマの村がひろがる。ここまでは，昨年も来た。ここから先が未知の世界。奥へ行けば行くほど，村は原始性をおびてゆくだろうと思った。

しかし，この先にあったのは，意外にも二つの低地入植者の村，バリティとルスッドであった。そこからはボンガボン川の川幅も狭まり，しだいに流れもスピードも増してきた。川原から岸へあがり，高巻きをしなければならない。いつヒルが落ちてきてもおかしくない，薄暗いジャングルのなかで踏みあとをたどる。

そこには，集落としての村なんか存在しないし，第一，人間とすれ違わなくなった。これは，ブヒッド族はもともと，家族単位で山から山へと移住生活するのが本来の姿で，むしろ村を作っているところの方が，政府の行政機関に組み込まれた変容の姿であったのだ。人と会わなくなったのは，彼らがここに住んでいないからではない。私たちが近づいてきたのを，彼らの勘というか，動物的本能でとっくに察知して，どこかへ逃げてしまったのだ。その証拠に，時折散在する家の炉に，まだあたたかいぬくもりが残っていた。

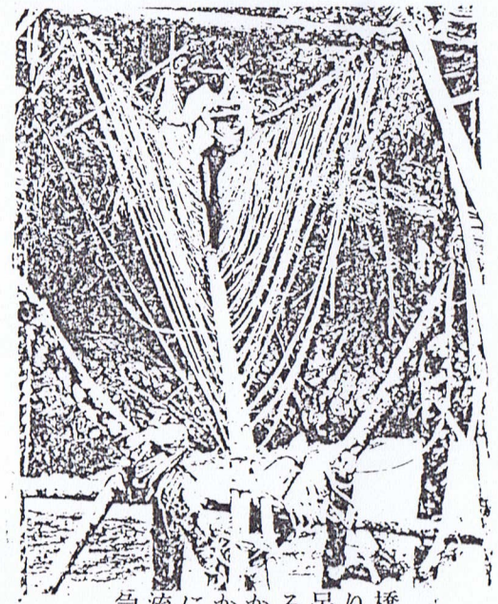
この日は，仕方なく主なき家に，御世話になった。こうなると食料調達が難しくなってきた。私たちは，一人一日二合，十日分の食料しか持ち合わせていない。昼は，現地の人から，イモやバナナをもらうことをあてにしていた。この頃より，はっきりしなかった天気も，本格的な乾期の空となって，一層，暑さがはげしくなってきた。三十度を越えるじめじめした密林のなかで，空腹とたたかいながら重い荷物を背負う。三十分も行動するとフラフラになり，毒蛇やヒルを恐れる余裕もない。それにもかかわらず，奥地に詳しい，新たに雇ったガイドのアルボトヤンは，悪戦苦闘している私たちを振りむきもせず，ターザンのように，ジャングルのなかを跳びはねて，ぐんぐん進む。

本多勝一氏の『ニューギニア高地人』にでてくるような，とうで作られた吊り橋を，三度渡ったところで，ついにタウブイッド族と遭遇してしまった。タウブイッド族の生活エリアは，ミンドロ島中南部の西側で，東側のブヒッド族との境界線上に，バゴン族が住んでいると考えたから，やはりバゴン族は幻だったのか？それとも，バゴンのエリアを通りこしてしまったのか？一体ここはどこなんだ。

戦後間もない頃，米軍が製作したという5万分の1地図を開く。ネストールのいう現在位置と私たちがコンパスや高度計を駆使して割り出した現在地は著しく異なった。彼の指す現在地は昨日から動いていないのでおかしいとはおもったが，彼の自尊心を傷つけないためにおれた。後にキッコーから聞いた話だが，ボンガボン川の土名は，サファビナガウ。地図では，バコ山の麓から流れでている川が，ボンガボン川となっているが，実は，これはギニヤン川という支流で，地図上でロザンナ川と表記されている川が，サファビナガウの本流であった。その間違った地図を見て，ボンガボン川を遡れば，バコ山に辿り着くと考えたが，ネストールは，事実に忠実にサファビナガウを遡る道を案内してくれたのだ。バコ山登頂の夢は，これで消えたが，この先のマスボ川の出会いにいけば，「木の皮のふんどしを着けた未開な民族がいる」というので，とにかくそこまでは，行ってみることにした。

岩場には，民族が多数たたずんでいた。パイプを2ペソで譲ってもらった。それはまだ作りかけのもので，ウエストバックに入れていたら，水濡れて後かたもなくとけてしまった。粘土製であったのだ。女たちに，カメラを向けると逃げまわった。私たちに背を向けて岩陰に顔を伏せている。そうこうしているうちに陽が陰り，この河原で野宿することになった。

三月九日，今日は田村君の誕生日で，高梨君と大沢が，小麦粉と砂糖と重曹をまぶして，なんだか怪しげなケーキらしきものをつくった。満天に輝く星空の下では，何でも美味しく味わえる。無数に飛び交うホタルの光りがキャンドル代わりだ。



急流にかかる吊り橋。
一度に一人しか渡れない

ドキュメント・三月十日

幻のバゴン族と接触！？

「あっカメラが危ない」

6時，目を開くと空は曇り空。背中が所々痛む。岩がつきでていたところだ。昨晩はよく眠れなかったが，河原で寝転んで，星を見ながら寝るのは，結構気持ちいいものだ。米にカレー粉とコンビーフを混ぜて炊いた御飯を食べる。ガイドのネストールやアルボテヤンは，「日本人は，こんな粗末なものばかり食べているのか」と思っていることだろう。

8時，出発。石跳びづたいに河原をすすむ。川は次第にV字谷となり，三点確保をしながら，岩に張り付いて，歩を進めねばならない。右足をひっかけていた岩が剝がれた。3㍍下の急流のなかへ，ドッボーン。バランスを失って，下半身と右半分が，ずぶ濡れ。思わず発したセリフが，「あー，買ったばかりのカメラが，パーになっちゃうよー」　結局，カメラは無事であったが，精神的肉体的ショックよりも，経済的ショックの方が先にたつ自分の精神構造を疑った。

今度は，大岩に縦横無尽に張りついた木の根を，梯子にして登る。ビシィー！体中に電撃が走った。見ると，顎だけで1センチはあるオオヤマアリが，掌に喰いついていた。払いのけると，刺し傷から血がしたたり落ちた。

9時，険しい道を大きなザックを背負って歩くのは，スピードが遅く，おまけに危険が伴い，得策ではないので，ここで大きなザックを下ろす。カメラ，フィールドノート，寝袋，1日分の食料と水，それに貴重品だけをサブザックに詰め込んで，大きなザックは茂みのなかに隠す。とにかく今日中にマスボへ行って，バゴン族の家を探し出し，接触に成功すれば，改めてザックを運んで，定着して調査を始めるという短期決戦型の作戦だ。

10時，身軽になって再び出発。苔蒸した岩の上を歩くので，足が滑ることには，かわりないが，すぐにバランスを取り戻せるので，水を得た魚のようにスイスイ進むことができる。川幅も，7～8㍍位になり，なんとか横切ることのできる規模になってきた。両岸には岸が迫り，時折川の真ん中に，バカでかい岩が横たわっている。雨が降ってきても，日差しは相変わらず強いままだった。

マスボ失望の山

12時，マスボ川の出会いに着いた。周囲に，人家はおろかバナナやヤシの木さえない。みんな，2時間にわたる大強行軍で大バテ。その強行軍の張本人，アルボトヤンが，あっという間に，薪を集めて火を起こしてくれた。対岸に小高い丘がある。あの頂上から周囲を見渡せば，どこかに焼畑が見つかるかもしれない。昼食後，登ってみることにした。

1時半，川を渡って，2㍍程ある草むらに飛び込む。下から見るとなだらかな丘に見えたが，実際登ってみると，ほとんど垂直に登る急登で，岩がゴロゴロして危ない。ウツボカズラに似た，5㌢程の大きな食虫植物の赤黒い花が，周囲の緑とコントラストをなして美しい。草にしがみつきながら，下を眺めると，なるほど川筋がよく読みとれる。右に枝分かれしているのがマスボ川，左に蛇行しているのがボンガボン本流。いったいどこまで続いているのだろう。その二つの川の間の丘に，正方形に，山肌が焼けている。明らかに，焼畑の跡だ。マスボ川に下りる道が続き，橋らしき丸太が横たわっている。真下の河原では，この山登りに参加することを拒んだガイドのネストールとアルボトヤンが，涼しそうに体を洗っている。対岸は，どこまでも山が連なり，緑一色であるが，一箇所だけ，正方形の茶色くなった部分がある。焼畑にしては小さすぎる。あれはなんだろうか。一応，ピークらしきところにでたが，薮が深くて何も見えない。探検部ではよく経験する，骨折り損のくたびれもうけ登山である。この山を，「マスボ失望の山」と名付けた。こういう山は，下山する時が危険だ。股下に草を挟んで，滑り下りた。沢に出たときは，体中，植物のトゲで傷だらけの血みどろになった。首に掛けていたタオルも，いつの間にか，無くしていた。疲れた。「これで，俺の青春を賭けた探検も終わりだな」とつぶやきながら，服を脱いで，川に飛び込んだ。

午後4時からの挑戦！

ここは，毎日雨が降っており，増水すると危険だから，荷物をデポしたところまで戻ろうと高梨君が力説するので，わたしも，帰り支度を始めた。あと，四週間もなにをしていようかと考えながら。そこへ，マスボの上流の方を見てきた大沢がやって来た。この先に橋らしきものがあり，山へ続く踏み跡があるという。さき程上から見えたやつだ。すっかり，撤退する気でいた私は，最初相手にしなかった。田村君が乗り出してきて，「何でもいいから，とにかく，行ってみよう」といった。時計

は3時半をまわり，日も傾き始めている。装備や食料も最低限のものしかない。さきほどの「失望の山」登山で，体力を消耗し，精神的にもやる気を失っていた。そんな状態で山に登り始めるのは，あまりにも無謀なことである。しかし，田村君の輝いた目を見た時，「うん，これは何かあるぞ。もうひとふんばり，がんばってみよう」と，突然決心した。しかし，こういう危険が伴う場合は，人に強制できない。高梨君と小嶋君，ネストールとアルボトヤンは，引き返すという。

四時，チャレンジ隊と退却体は，同時に，それぞれ反対方向へ出発した。チャレンジ隊は，発見者の大沢君と，言いだしっぺの田村君と便乗した私の三人。民族と接触できなくても，せめて焼畑や家でもあれば，という思いだった。大沢君の案内で，橋から北側の山中に続く踏みあとをたどる。森の中は，青木ガ原の樹海のように木がいりくんでいて，薄暗い。踏みあとはあるが，見失いやすい。十五分入ったところに，枝木をならべたてた棚がはりめぐらされていた。作物をねずみや猪から守るためのものか。民族の息吹を感じた。大沢君が，ワナがしかけられているのを発見した。ネズミが通れるくらいのトンネルがあり，そこを獲物が通ると，ひっかけてある枝が折れて，首輪が跳ね上がるしくみになっている。ここよりメモ帳をちぎって，道標として落としていった。

とにかく，踏みあとに忠実に山を登った。見失うと三人で手分けして探し，今度は見つけたものが先頭に立つという方法で，歩を進めた。ピーピロと，鳥が不気味な鳴き声を放っている。私たちが進めば進む程，声が高まり，「こっちに来てはいけない」と，訴えているようだ。水のしみだしているところに，葉っぱがそえられて，水が飲めるようになっている。この近くで，誰かが生活しているはずだ。民族のにおいがする。

バゴン族発見！？

林のなかが，だんだん明るくなってきた。ピークも近い。その時，木々のむこうに，うっすらと三角形が見える。なんだ？みんなに静かに制止するように合図をおくり，道が途切れるところまで行って，木の影からそっとのぞいてみた。

「やっぱり家だ。しかも立ち木を柱に利用し，樹皮で壁をつくり，入り口の部分は，鐘型にくりぬいている。今まで見たブヒッド族の家とは，随分ちがう。規模も大きい。家の向こうから煙があがり，オノで薪を切る音がする。まだ逃げていない。絶好のチャンスだ」

はじめ，この風景を目にした姿勢のままで，くぎづけになって，様々な考えが頭をよぎった。それは感動というよりも，本能的な興奮に近いものだった。時計をみると，五時ちょうどだった。

「フィヤ・ファッグ・カヤビ（ブヒッド語で，こんにちは）」と，つくり笑顔で叫んで，家に近づいた。しかし，切り払った木の枝で，家へ通じる道は，カモフラージュされており，思うように進めない。

そうこうしているうちに，左手に山刀を持ち，ひげ面で茶毛の三十五，六と思われる男が現れた。「こんばんは，私たちはバタンガンからやってきた。怪しいものじゃない」と言って，反射的に両手をあげた。しかし，男はものすごいけんまくでがなり始めた。「カヤビ．．．．サファ．．．」と断片的な単語しかわからない。ただ歓迎していないことはわかる。帰れ！こっちにくるなといいたげだ。言葉が通じないことは，我々にとって恐怖だが，彼らにとっても，悪魔の刻印だ。ザックのなかから，彼が喜びそうなビー玉，ライター，ビーズの入ったおみやげ袋を取り出し，男の方に投げわたした。その瞬間，しまったと思った。男は受け取らずに，袋は下に落ちた。男はあいかわらずわけのわからない言葉をまくしたてている。私は，田村君と大沢君がいるところまで下がり，ザックをおろした。「まず，お互いに冷静にならなければ」と，ザックからポリタンを取り出して水を飲み，飴をなめて座り込んだ。男は，鐘型の入り口から斧を取り出し，右手に斧，左手に山刀をもって，帰れコールをしている。時折，男の背後から女が顔をみせたが，やがて消えた。

これではラチがあかない，と田村君が立ち上がり，男の警戒心をとくために上半身裸になって両手をあげ，倒木づたいに家に向かって進み，男の前に立った。その姿は，まるで人質をかこってとりもっている犯人を説得にいく刑事のようであった。田村君は，先程私が投げた袋を拾いあげて，ビー玉や貝の首飾りビーズ玉を見せて，塩をおいしそうになめてみせた。一瞬，男の顔がほころんだ。が，それとこれは話は別だと言わんばかりに，また，がなりたてている。そんな田村の説得工作のスキに，私はこのシーンを記録に残さねばと，隠し撮りで，シャッターを押し続けた。大沢には，彼の言葉をメモってもらった。

男は，女が逃げたかどうか確かめるために，家のなかに，のぞきこみにいった。その間に，私も家の縁側にあがった。男が戻ってくると，「もう夜で暗いからここにとめてほしい」と熱意をこめて，身振り手振りに日本語もまじえて訴える。「夕焼けこやけの赤とんぼ．．．」と歌もうたってみた。しかし，彼の反応は冷たいものだった。「暗いなら，わしが川まで送ってやろう。とにかく，ここから立ち去ってくれ」と，

たいまつを取り出した。「足を怪我してうごけない。ここで寝るんだ」と，もうこっちも意地になって座り込んだ。男は，松明をかたずけて，パイプに火を点けて，しばらく罵るようにつぶやいた後，家の中に入って，ガサゴソやっている。

そして，ニワトリだけが残った

コケコッコー。いつの間にか，物音がしなくなった。慌てて，鐘型の入り口から家の中を覗いた。既にもぬけのからだった。逃げた。「お前らが帰らないならば，俺が立ち去る」というわけか。文明を拒否する側の論理は，ここまで徹底したものなのか。炉からたち昇る煙を見ながら，ちょっぴり罪悪感にひたった。私たちがいる限り，彼は戻って来ないだろう。もしかするとまだ薮の中から，私たちの様子をうかがっているかもしれない。川まで下って，野宿することにしたが，その前に，家宅捜索させてもらった。家の付近は，切り株が目立つ。もしかするとここが，「失望の山」から見えた「正方形の茶色」かも知れない。まだここは，家が建って間もないせいか，焚き火の跡が五，六箇所ある。沢からの道は，簡単に近付けないように，木を横たわせてカモフラージュしてある。家の裏側には，おんどりが一匹。家の中に入る。天井は低く，干したカエルがぶら下がっている。床には，ココナッツの瓢箪，徳利型の陶器とブヨッグ（藤で編んだバスケット。頭から下げる。）が置いてあり，タバコの葉が詰まっている。壁には樹皮，床には竹が並べられ，柱は藤で巻かれて固定されており，釘は使っていない。文明の利器を感じさせるものは，男の耳にぶら下がっていた安全ピンと，持っていた斧だけであった。迷惑料として，ビー玉，ビーズ玉，貝の首飾り，ライターの入った袋と塩を鐘型の入り口に置いた。おじさん，びっくりさせて，ごめんなさい。今度来る時は，仲良くしようねという思いをこめて。

6時，もうすぐ日が沈む。ヘッドライトを頭につけて下山開始。林の中は，既に真っ暗だった。来る時，落としておいた目印の紙キレが，大いに役だった。入ったばかりの沢に近い所には，落とさなかったので，迷いに迷った。同じ道を行ったり来たりしているように思えた。それでも，耳を澄ませて，沢の音を聞き分けて，強引に河原におりた。

7時，荷物を下ろして薪集め。暗くて，思うように集められない。下半身ずぶ濡れになって，対岸から大量に薪を運んで，火をおこした。火を囲んで座り，靴を脱ぐ。何んか，足がムズムズするなあと思い，ライトをあてると，ヒルが食い付いていた。タバコで焼き殺すか，血を全部吸われるのを待つのが最善であるが，見ていて，気持ちの良いものではないので，無理やり引っこ抜いた。吸着部が足に食いついたまま残り，血があふれた。結局，大沢君は五匹，私には三匹のヒルが喰いついていた。田村君は，上半身裸でいたので，体中を蚊に喰われていた。急に，空腹感を覚えた。食料は米一キロのはずであったが，コーンスープ，干魚，ふりかけ，カロリーメイト・・・出るわ出るわ，みんな自分だけは生き残ろうと，こっそりザックの奥にしのばせていたのだ。米を二度炊いて，一人三合ほど食べた。

十一時半，映画の一シーンのような今日一日の出来事をフィールドノートに書きとめた。「事実は小説よりも奇なり」という言葉を体得した。俺たちの経験したコトは，水曜スペシャルの川口探検隊よりもすごいんだぞ，と思った。

いざというとき，自分を犠牲にして，女を逃がしたあの男の行動を思い起こした。「弱者をいたわる」忘れかけていた「おとこ」の本能をあらためて学んだ。

幻のバゴン族と上半身裸で交渉する
田村隊員（隠し撮り）

体位と民族　田村康一

ボンガボン川上流の探検を終えたあと，オゴン・リゴマに住みこんでフィールドワークをおこなう予定だった私は，食糧を補充するためにバタンガンへ戻った。

私は部落のカピタン（長）であるネストーロの家で，マンガを読んでいた。隊員の誰かが日本からもってきたのだ。すると，そこへ子供たちが集まってきた。そして私からマンガをうばいとると大騒ぎを始めたのである。ちょうど，男女が後背位でセックスをしているページを開いていたのだ。

騒ぎを聞きつけてやってきた大人たちも，子供と一緒になって歓声をあげている。私が呆気にとられていると，そこへサイナがやってきた。サイナは部落のコンセハル（委員）で，英語も話すインテリである。彼は興奮する村人たちをたしなめてマンガを手にとると，不思議そうな顔でつぶやいた。

「Different position.（ちがう体位だ）」

なんとブヒッド族のセックスには，後背位というスタイルはないのである。村人たちは，タオ（人間）が，ハヨップ（けもの）と同じやりかたでセックスをしているのをみて，驚いたのだ。

「ハポン（日本人）は，こんなかっこうでセックスをするのか」

「まるでヤギのようじゃないか」

「おまえもこうするのか」

村人のストレートな質問に，私はたじたじになって逃げ出した。

♪ウティン，ウティン，ボォガ・・・と歌いながらダンスでふざける子供たち

因みに，ウティンは女性のシンボル，ボォガは男性の象徴の意味

ゴキブリの家　田村康一

ボンガボン川の氾濫平原を，かすかなふみあとをたどって，上流へつめてゆく。川幅はやがてせまくなり，両岸に山がせまってくると，道は川ぞいから熱帯降雨林のジャングルへと，続いてゆくのだ。ガイドのネストーロも道を知らないので，私たちはふみあとをはずさないように，慎重に歩を進める。あたりは，恐ろしい毒ヘビや，吸血ヒルが潜んでいるうっそうとしたジャングルだ。

「バライ，（家だ）」

先頭をゆくネストーロが立ち止まった。前方に，高床式の小屋が二件建っている。人の気配はない。あたりをみまわすと，小屋の近くにはえているバナナの木に，ブイッド文字が彫りこんである。ここはブイッド族のすみかのようだ。

私たちは人がいないのをいいことに，家のなかへあがりこんだ。今は焼き畑の火入れのシーズンである。この家の住人たちは，おおかた山の出づくり小屋にでも泊まりこんでいるのだろう。そう考えた私たちは，今夜ここに泊まることにした。

家の中には，とうもろこしがたくさんほしてあり，一番奥に炉がかまえてある。竹で組んだ床の上に腰をおろして下をみると，なんとそこらじゅうをゴキブリがはいまわっているではないか。まるでゴキブリホイホイの中にいるようである。

翌日，朝ごはんを作るために，ザックの中の干し魚を取り出した小嶋が悲鳴をあげた。干し魚に無数のゴキブリがこびりついていたのである。私たちはあわてて，それぞれのザックを調べてみると，でるわ，でるわ。中からうじゃうじゃと，ゴキブリの大群があらわれたのである。

数日後，奥地の探検を終えた私たちは，またゴキブリの家に泊まる羽目になった。朝起きてみると，例によってザックの中はゴキブリでいっぱいである。

「ちくしょう，こんな家に泊まるのは，もうまっぴら御免だぜ」

私がエキサイトして外へでると，家の前で，粘土製のパイプをくわえたブイッド族の夫婦が，呆然と立ち尽してこちらを見ている。まずい。この家の住人たちが帰ってきたのだ。

「フィヤファッグ　マロンマロン　（おはよう）」

私はしらじらしく挨拶をして，その場を取り繕ったのだが，彼らは依然として呆気にとられたままだ。無理もない。留守中に，どこの馬の骨ともしれない外国人が五人も，なんのことわりもなしに泊まっていたのだから。彼らが驚きのあまり，絶句してしまったのもあたりまえである。

家の主人の名前はパンディングといって，焼き畑の火入れ作業のために，しばらく家をあけていたらしい。私たちはネストーロを通じて事情を説明し，許しを請うたのだが，彼らの怒りの表情は消えなかった。どうやら，太平洋戦争時に駐留していた日本兵に続いて，またまたミンドロ島の山地民の反日感情に火をつけてしまったようである。

それからしばらくして，私は大槻と二人でギニヤン川上流の探検にでかけた。その途中で，パンディングの家により，先日のお詫びにと，お土産をわたすことにした。奥地のブイッド族が大好きなたばこと，使い捨てのライターである。招かれざる客に対して，露骨に嫌な顔をしていたパンディング夫妻だったが，お土産を見ると途端に相好をくずした。

「よくきてくれた。あがってイモでも食ってゆけ」

パンディングがいう。現金なものだ。これで和解成立である。私はほっと胸をなでおろした。しかし，また荷物のなか中にゴキブリが入りこんできてはたまらない。私たちは彼の申し出を丁重にことわり，ギニヤン川にむけて出発することにした。

「これからは俺が留守のときでも，この家を自由に使っていいぞ」

パンディングはそういうと，おそらく私たちが二度と入れないように取りつけたのであろう，扉の鍵をはずしたのだった。

ところで，この話にはおまけがある。他の隊員よりも一足先に帰国した梨くんが，成田空港の税関で荷物検査をうけたときのことだ。

「なにか申告するものはないでしょうね。例えば拳銃とか麻薬とか」

検査員が例によって，鋭い目付きで威嚇しながら荷物をしらべていると，突然ザックの中からゴキブリが飛び出したのだ。パンディングの家から日本まで，ずっと潜んでいたのである。

「君こまるよ，こんなものもちこんじゃ」

狼狽する検査員を尻目に，ゴキブリは目にもとまらぬはやさで，成田空港の雑踏のなかへ姿を消したのであった。

その後，検査員が自らの任務を全うして，ゴキブリを見つけだしたかどうかは謎である。

ミンドロ島の自然

大沢啓志

カラパンから南へ一路，遠くハルコン山の峰々をいだきながらバスは行く。どこまでも広がる水田。一枚が一反もあり，ところどころにヤシの木が数本立っているだけである。おおかた，その木陰が農作業の疲れをいやし，その実は乾いた喉を潤すのだろう。

南国の太陽のひかりをいっぱいに浴びて，今まさにのびざかりの青々とした稲があるかと思うと，隣の田では刈りとられた穂が山積みにされている。田植えをしたばかりの田，黄金色の穂が美しく波うつ田。なにか妙な気分になったが，ハッと気付いた。

「そうか，この国に冬はないんだ」

そう，この国には四季がなく，実れば刈り，また植えるだけなのだ。今は三月，乾期の真っただなかであったが，一日一度はスコールがくる。雨水は土にしみこみ，岩の間から清水となって湧きだしていた。この豊富な水と光とが，この緑の国をささえているのだった。

バタンガンの焼き畑で

大沢啓志

バタンガンで一人の村の若者と一緒に，山に登った。彼の畑をみせてもらうのだ。急な山道を行くと，彼は突然立ち止まり，腰からボロ（山刀）をぬくと，いきなり地面にたたきつけた。

「ヘビだ！」

鮮やかな赤と黒のまだら模様のヘビが，頭をつぶされてもがいていた。彼の話によると，何人もの人が毒にやられて死んでいるらしい。ヘビを食べるのか，と聞くと，

「とんでもない」

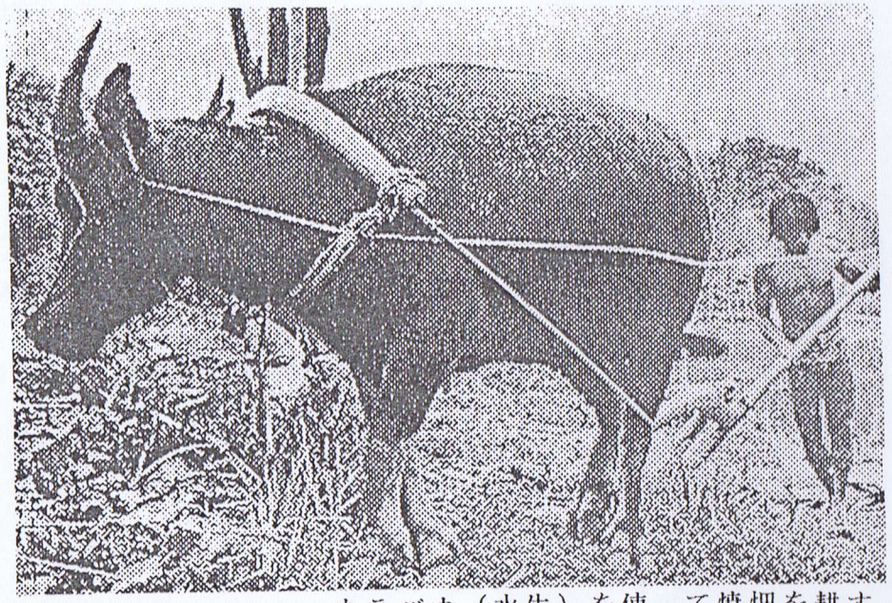
と，彼は答えた。

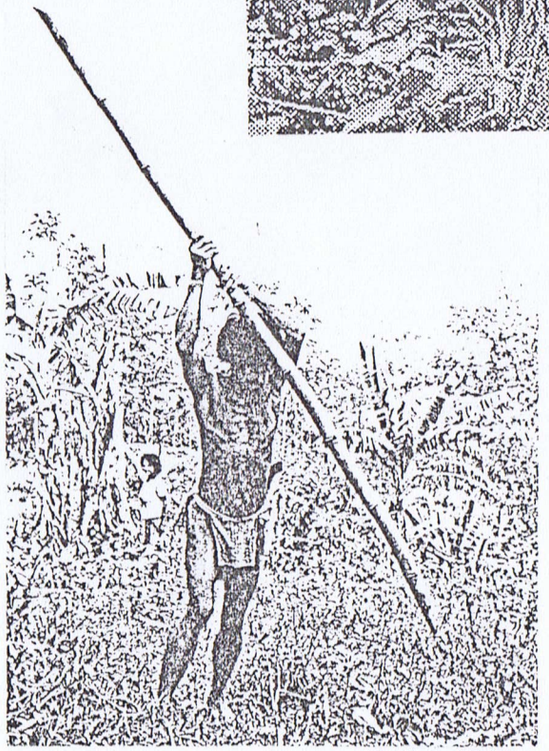
途中，ヤシ林のなかで一休みした。ヤシの実の汁を飲んでいると，

「ちょっとまってろ」

といい，彼はヤブのなかへ入っていった。しばらくして戻ってくると，彼は手に，数本の黒い節のある茎をもっていた。それをみた子供たちは，「ワァー」とうばいあって，皮をむいてかじった。僕も一本わたされた

ので，みようみまねでかじってみた。
「あまい，サトウキビだ！」
精練された砂糖など手に入るはずもなく，甘いものの少ないところなので，子供たちにとっては大ごちそうらしい。
さらに急斜面を登り，尾根に出るというところで，やっと彼のイモ畑にたどりついた。北向きの斜面の石のあいだには，ところどころにイモのつるが這っていて，一目で土地がやせ細っていることがわかった。彼らが掘ってみせてくれた数個のイモは，小さく，虫食いだらけであった。それでも子供たちは，うれしそうに次から次へと小さなイモを掘り集めた。


カラバオ（水牛）を使って焼畑を耕す


とうもろこしの種蒔き風景

ヤヤグ

大沢啓志

三月十九日，ヤヤグ村に着いた。今日は僕の誕生日である。十九才の初めての夜を，こんな異国のわけのわからない地に一人で，しかも今夜の眠る場所もはっきりしないまま迎えるなんて，夢にも思わなかった。村の入口にある樹上見晴らし小屋の下を通り，中央の広場に重いザックを置くと，さっそく子供たちが珍しそうに集まってきた。
日が暮れる頃になると，ようやく大人たちも仕事を終えて戻ってきたので，話しをつけて，どうにかコンセハル（委員）のヤヤグの家に泊めてもらえることになった。彼の家は村のほぼ中央に位置し，普通の家を四つくっつけた構造で，かなり大きい。その夜は，村の人がヤヤグの家に集まり，互いに言葉を聞きあうなどの交流をした。
今はカイギン（焼畑）のシーズン，一年で一番忙しい時期である。翌朝，まだ日のでる前から，ヤヤグ一家は一頭の水牛を連れて山へ向かい，僕もこれはのがすまいと後からついていった。三十分も行っただろうか，まだ煙のくすぶっている彼の畑へ着いた。
ヤヤグは，岩だらけの斜面に棒で穴をあけては，コーンを四粒づつ入れていく。午前中，二時間もやっただろうか，陽が高くなると木陰で昼寝。子供は川で水牛と水浴びをする。午後は西にだいぶ陽が傾いたころになってから，一時間くらいしか働かない。先にも述べたが，今が一年で一番忙しい時期である。そう，ここは南の国。ふりそそぐ陽の光と，スコールのおかげで，ほっておいても，作物は育つのだ。食べ物の心配があまりないから，そんなにあくせく働くこともないのである。
帰る途中，大人ふたりが山へなにかを採りにいった。戻ってくると，手にしたヒマワリの花のようなものを，子供たちが奪いあった。もしやと思ったが，案の定ハチの子だった。当然のことながら，僕のところにも一枚まわってきて，食べてみろと言われた。とりたてのローヤルゼリーは，すごく甘くて美味なのだが，巣にびっしりつまったハチの幼虫を生きたまま食べるのにはなかなか勇気がいる。まわりでみんなが見ているから，今さらいらないとは言えず，おもいきってかぶりつく。くせのあるえぐ味で，わりとたんぱくなあじである。六角計の壁が口にのこる。
僕は笑顔をみせて，
「カフィヤオン（おいしい）」
と，答えたものの，残りを口につめこんで，もう二度と食べまいと心に

誓ったのである。

バボイ　小嶋健太

便意を催した私は，トイレットペイパーを片手に家をでた。村の横を流れる小川を越えて，適当な場所に腰をおろす。もちろん，村から私の姿が見えないのは確認してある。

あたりににおいが漂い始めると，バボイ（ぶた）がそれをかぎつけて集まってきた。五メートルほど先から三，四頭かたまって私を恨めし気に見つめている。

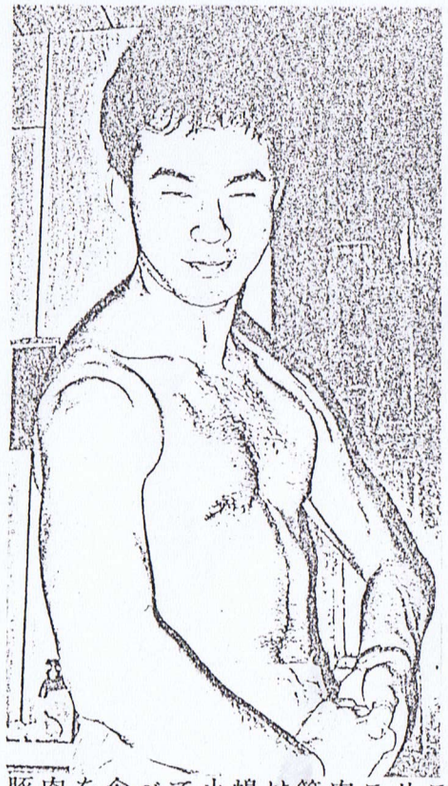
「なんだこの野郎！」

排便時を襲われてはたまらない。私は彼らをにらみつけながら用を足す。

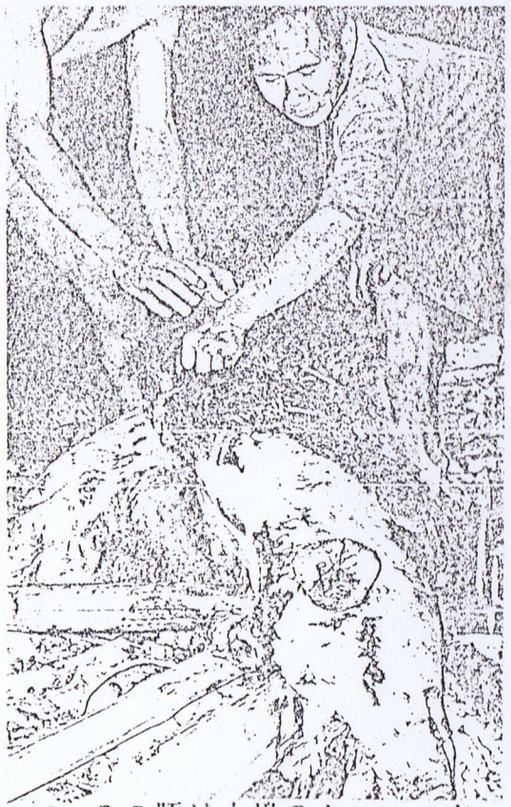
落ち着かない時を過ごし，そそくさとその場を離れる。すると彼らは，ついさっきまで私が腰をおろしていた場所めがけて，猛然と突進していった。彼らはうんこを食べるのである。

そういえば，村人がぶたにエサをやっているのを見たことがない。それにしてもうんこを食べるとは・・・。

そのせいかどうか，ここのぶたは脂身ばかりである。



豚肉を食べて小嶋は筋肉モリモリ！



カラバオ　小嶋健太

鈍重な動物（水牛）である。彼が走っているのを私はみたことがない。体中の筋肉，すべてが遅筋という感じである。でも，パワーはすごい。それが彼にとって災いしているのだろう。徹底的にこき使われている。

バタンガンでの準備期間を終えて，いよいよ奥地への進行を開始した日のことである。ハガンでバスを降りた私たちは，ホゴン・リゴマまでの約二時間の行程を歩き始めた。フィリピンに渡ってからトレーニングを怠っていた体に，ザックの重みがズッシリこたえる。

しばらく行くと，後ろからゴロゴロと重そうな音が聞こえてきた。振り返って見ると，カラバオが荷物を引いている。（日本風に言えば牛車であろう）カラバオなどにつつかれてはたまらない。私たちは慌てて道の脇によける。

牛車をやりすごして後ろをノタノタついていく。御者役の女の子がこちらをみて何か言っている。どうやら荷物を乗せろと言っているらしい。なんとタイミングのよいことか。遠慮せずに乗せてもらおう。

カラバオに荷物をまかせて，空身でブラブラ歩く。彼は急に重くなったはずの荷車を，嫌う素振りも見せない。高梨さんが，

「今度生まれるときは，カラバオだけには生まれたくないな」

と言う。同感である。カラバオに生まれるくらいならば，ゴキブリになったほうが，自由なぶんだけましというものだろう。

牛車の車輪は，木でできている。しかも，その車輪はひどくデコボコである。道もまた，ひどくデコボコである。それでもカラバオは黙々と車を引き続ける。

しかし，疲れたカラバオは，ついに職務放棄をすることにした。道の脇にあった水たまりにすわりこんでしまう。すると女の子が，ヒモで力一杯カラバオをひっぱたいた。しぶしぶ立ち上がるカラバオ。歩き始める前に，二十秒ほどかけて小便をしたのは，彼のせめてもの抵抗だったのだろうか。

村へ着いて荷物をおろす。子供がカラバオが動きださないように，金玉を引っ張っておさえていた。

ハガン　小嶋健太

夜の九時ごろ，村のサリサリストアーからの帰り道。川添いに，小さな炎がチラチラと動いている。子供たちの歓声も聞こえる。

何をしているのだろう。私は行ってみることにする。

子供が，長い竹の先に火をつけて川を照らしている。近づくと，私の方を振り向いてニコッと笑った。なんだクチンじゃないか。彼女はおかっぱ頭をした可愛い女の子である。歳は十歳。奥地に入って以来，私は常々思ってきたのだが，マンヤンには美人がいない。可愛いらしい少女はあまたにいるのに，なぜか美しい女性は見当たらないのである。以下は私の独断と偏見に基づいた考えであるが，思うにこれは結婚年令の低さに関係があるのではないだろうか。彼女たちの結婚年齢は非常に低い。奥地では，十歳を過ぎたらもう適齢期である。十代前半から子供を生み始めたら，早く老いるのも当然だろう。十代後半で中年に突入，四十を過ぎたらもう婆さんという感じである。可愛らしい少女たちは，人生の最も美しい時期を一足飛びにして，おばさんとなり果ててしまうのである。でも，クチンは大丈夫。この村（バタンガン）は教育も普及していて結婚年齢も割と高いし，きっと美しく成長することだろう。

クチンは竹棒のあかりで大きな石の裏を照らす。覗きこむと，１０センチほどの大きさのカニが水の中でユラユラ揺れている。

「ハガン！」

クチンが叫ぶ。私は水の中に手を突っ込んでハガンを捕まえる。

捕まえたハガンを，隣の女の子に渡す。すると彼女は，無造作に両方のハサミをもぎ取ってしまった。多分，挟まれないようにということなのだろうがそれにしても，私はしばし唖然としてしまった。そして，自然とともに生きている彼女たちの力強さを感じた。人間は本来男も女もこのように力強いものなのだろう。女の子が，ヘビやカエルを怖がったり，カニのハサミをもぎ取るといった残酷な行為を嫌ったりするのは，後天的につくられた性質なのであろう。

クチンが私に手を出せという。右手を出して広げると，手足のないハガンを二つコロコロと渡してくれた。

もらったハガンを焚き火に放り込んで焼く。頃合を見計らって，最初に捕った大きいヤツを取り出して二つに割ってみる。中身はガランとしていて食べられそうな所は殆どない。大沢と高梨さんがジストマがどうこういっているので，軟らかそうな所だけ少し口に含んで残りは捨てる。

焚き火の炎が弱くなってきた。クチンが火勢を取り戻そうとして溜まった灰を掻き出している。その時，彼女はさっき私が捨てたハガンのかけらをを見つけた。不思議そうな顔をして灰だらけのカニを見ている。「まさかこれを食えっていうじゃないだろうな。」私は恐れを抱く。

しかしクチンは，とろけるような微笑みを浮かべると（あんな顔をされたら，私はゴキブリでも食べるだろう），ハガンを私に差し出した。

「食べなよ！」

もう食べるしかない。私は灰だらけでガランドウの，ジストマの恐れのあるハガンをバリバリ噛み砕いた。

「フィヤ！（美味しいよ！）」

「キャー！」

飛び上がらんばかりに喜んだクチンは，さっそく二匹目のハガンをさしだしたのだった。

とっても素敵な笑顔をみせてくれる子供たち

ヒル　大沢啓志

意外とわかるものだ。足もとがなんとなくむずかゆく感じたときなど，「これはいるな」と。でも隊の行動中に，勝手に立ち止まるわけにはいかず，気にせず進む。空を覆う木々からこもれ陽がさす，暗い樹林のなかで，やっと休憩となった。急いでザックをおろして，ズボンをめくると，案の定，黒光りするヒルが，しっかりと足にくっついている。・・・三，四，五匹もだ。ナイフの先をライターで熱し，熱くなったら，ヒルの体に押し付ける。「ジュー」という音にヒルはたまらずシャクトリムシのように足の上を逃げまわる。そこをすかさず指ではじくのだ。あとには三つの歯型に血がにじんでいる。無理に引っ張ると傷口が広がってしまう。五匹ともはじき飛ばし，一息ついてからあたりをみやると，湿った落ち葉の上を，人間のにおいで刺激されたのか，いく匹ものヒルが，さかんに動きまわっていた。

6週間も
フィリピンにいれば
けっこう鍛えられるぜェー

ふんどしをつけたアメリカ人

大槻英二

バタンガン村から十キロ，ボンガボン川を遡るオゴン・リゴマという村でのこと。私たちの世話役のガイノの家で，横たわってフィールドノートをつけていた。ふと戸口に目をやると，金髪あたまにホワイトボディの大男が，うす汚れたふんどし一丁でつっ立っている。確かにブビッド族の伝統的スタイルだが，髪の毛や皮膚の色が，どうもおかしい。突然変異か新人類か？ニタッと笑って，赤黒い歯をみせた。ママだっ！ママは東南アジアの諸民族に広く愛用されている嗜好品で，口に含むと赤く変色する。

「フィヤファッグ・カヤビ（こんにちは）」

覚えたてのブヒッド語であいさつしてみると，

「ハロー」

と，英語の返事がかえってきた。そして，どうぞとも言ってないのに，勝手にドカドカとあがりこんできてすわると，赤黒いママツバを竹であまれた床のすき間にはき出した。

彼の本名は，フランシス・フィッシャー。実は，正真正銘のアメリカ人。村人は，彼のことをキッコーと呼ぶ。推定年齢三十才。ＮＹ市立大学経済学部卒業後，平和部隊の一員としてフィリピンにわたる。ミンドロ島東部にあるボンガボンという町で，まず，タガログ後を習得した。キッコーというあだ名は，そのときの先生がつけてくれたものだ。フィリピンなんか英語で十分だ，というアメリカ植民地主義的思考をのりこえて，フィリピン大衆の言葉から習得していく姿勢がにくい。そのうえで，ブヒッド族の中心部落バタンガンに入る。洋服を脱ぎ捨てて，村人と同じふんどし一丁になり，村人の家に居候して畑を耕し，ブヒッド語を覚えていった。こうして，村人と同じ目の高さで，何が問題か，何が必要かを発見して，援助作戦を展開して，かれこれ六年がたつ。リーダーの養成，商品作物の実験栽培，紛争の調停役ｅｔｃ．

現在は，バタンガンから，ここオゴン・リゴマに根城を移して，大量の山羊を飼うための鉄柵の設置費十万ペソ（約七十万円）の援助をオランダ大使館に申請中。こうした息の長い着実な姿勢で取り組んでいるから，何度も任期を延長して平和部隊に六年，フォスタ・ペアレンツ・インターナショナルに移籍して二年がたつ。

「たった二年では，何もできないよ」
と，ＪＯＣＶ（日本海外青年協力隊）の神風ボランティアぶりを批判する言葉には，説得力がある。これほど長く居られるのも，彼は，ボランティア精神や社会的使命感にもえて，というよりも，村人の純粋さと村の素朴な暮らしを心から愛して，取り組んできたからであろう。
「私のライフワークは，野良仕事さ。毎朝早起きして山へ行き，畑を耕して，自分でつくったイモやとうもろこしを食べる。ここの暮らしは最高だよ。さみしかないかって？素朴で陽気で親切な友だちが，いっぱいいるから全然さみしくないよ。ただ，女の子は，十二，三才位で嫁にいってしまうから，なかなか結婚のチャンスはないよ。だけど，アメリカには，ママ（嗜好品）がないから帰りたくないね。」
と，ヤンキーらしいジョークまじりで本音を語ってくれた。

「ねェー彼女，俺の嫁にこないか？」（キッコー）

ママ　小嶋健太

キコという白人がいる。彼はこの辺りの村に住み込んでいるアメリカ人である。始めはボランティアとしてやってきた。二年前に期限がきれたにもかかわらず，別のボランティア組織に移籍して，未だにとどまっている。

白い体にフンドシ姿。長髪を後ろで結んでいる。彼は伝統的なマンヤンの習慣を，現在のマンヤン以上に守っているのだ。私は，ここまで徹底する彼の姿勢に感嘆した。とはいえ，色白で金髪の彼が，フンドシ一丁で生活する姿は，やはり異様である。

マンヤンの伝統を忠実に守る彼は，ママもやる。うまそうに噛んでは，唾をペッペと吐き出している。ママとは，マンヤンの愛好する嗜好品である。白い粉（貝の灰らしい）をリットリットという葉っぱにくるんで，チューインガムのように噛むのだ。これを常用するようになると，口や歯が真っ赤になる。キコの口もすでに真っ赤になっている。白い顔に赤い口はちょっと不気味で，どこかドラキュラ伯爵を思わせるものがある。もっとも，フンドシ姿で真昼の部落をうろうろするドラキュラなど，様になったものではでい。

最近では，マンヤンの間でも，ママをやる人は少なくなっているそうだ。若い人ははずかしがる（口の赤くなるのが）らしい。そうだろうな，と思う。私だって，可愛い女の子が真っ赤な口をして，ママを噛んでいるところなど見たくない。（本当は，こういった考えはまずいのだろうけど）

ある日の夜，キコが私たちの泊まっている家に遊びにきた。彼があまりうまそうにママを噛んでいるので，私も一度やらせてもらうことにした。キコに作ってもらったママを，おそるおそる口に含んでみる。別になんともない。しかし，噛み始めると，猛烈な渋みが口の中に広がってきた。渋柿から，渋だけはぎとって食べたら，あんな味がするんじゃないだろうか。舌の表面から，シュワーッと水分が抜けていく感じがする。キコが，しょっちゅう唾を吐くわけがわかった。唾が次から次へと溢れでてくるのだ。私はたまらず，ママを吐き出した。キコはいぜんとして，ママをうまそうに噛んでは，唾を外に吐いている。

「なんだこりゃ！」
翌朝，外に出ようとした田村さんが，すっとんきょうな声をあげた。見

ると，キコの吐いた赤い唾が，田村さんのサンダルにべっとりくっついていた。

マハリ　小嶋健太

夕食を終えた後，高梨さんは食器をゆすいだお湯を，窓ごしに捨てた。
「マハリ（熱い）」
窓の外で小さな声がした。オンナイ（可愛い女の子。高梨さんに好意をもっていた）が，窓の下の隙間から，中をのぞいていたのだ。彼女は大好きなタカナシにお湯をかけられて，ベソをかいていた。

カフィヤオン　小嶋健太

大沢は，今度の遠征に笛を持ってきた。これがマンヤンに大受けした。彼が笛を吹き始めると，みんな感嘆の声をあげる。
「カフィヤオン！（素晴らしい）」
　マンヤンの一人が，大沢の笛をとって吹いてみる。
「ピロピロピー」
ほとんど曲にならない。大沢いわく，
「これをノイズという」
しかし，私の耳には，大沢の曲（？）もマンヤンのノイズも，たいした違いは認められないのである。
　彼の演奏は，マンヤンには好評だったが，隊員には不評だった。

♭♪♪～
♪♪♯～

民族をひきつける魔法の笛

文明と地域文化の接点　大沢啓志

島の東側を南下する国道ぞいに，茶色一色のハゲ山がいくつか見られる。人の多い国道に近いところほど多く，奥地に行くとほとんど見られない。スコールのたびに濁水が表土を流れるそうだ。ロクタノン（他の島から移住してきた開拓農民）がめちゃくちゃに焼畑をおこなうために，こんなに山が荒廃したらしい。しかしロクタノンたちも，彼らの島を大手企業に買い占められたりして，やむなく移住してきたのだ。焼畑はもともと，かなり土地収奪的なものであり，多雨地帯ではスコールのために土地の養分はすぐに流れでてしまうし，表土流失のために不毛の地となりやすい。しかし，それにもまして，今日まで人々が生活してこれたのは，長い休閑期間をもたせることによって，充分な焼畑のサイクルを確立させてきたからである。しかし，マンヤン自身も人口がふえ，土地不足のために焼畑のサイクルが早められてきたのも確かである。それにどうやらハゲ山だけの問題ではないらしい。
　昼夜をとわず，轟音とともに頭上を行くジェット戦闘機，村の有力者が富の象徴とばかりに響かせるラジオ，村はずれに散乱する割れガラス，ビニール，プラスチックなど。ここ数十年の現象なのだろうが，なにかがおかしい。今まで何千年と続いてきた人々の暮らしが，別の方向へ急速に進んでいるようだ。そして，このような目に見える環境汚染も痛々しいのだが，目に見えない人々の心はどうなのかが一番気掛かりである。
　一例をあげる。バタンガンで小嶋隊員のカメラが盗まれたのだ。村の長は，村のもののしわざではない，ロクタノンだと言うのだが，だれもがいやな思いをした。以前は，個人の持ち物はみなカゴに入れて持ち歩いていたのだが，町から彼らにとって珍しく映る物がたくさん入ってくると，家に置くようになり，かつとられないように，レンガや板製の家にしたり，扉に鍵をつけたりするようになった。昔ながらの竹で編んだ家は，まさに通気性，住みごごちがその気候に根ざした形で作られているばかりでなく，そのオープンな作りが，村の機能に大きな役割を果たしてきたのではなかろうか。それを個々に密閉された家に住めば，当然心も閉ざされ，人を信じられない暮らしになるのではないだろうか。今まで村に伝わってきたものには目も向けず，別の世界からの真新しいものばかりにとびつく，おのれの足もとを見ずに遠くばかり気になるといったきわめて浮き足だった状況では，村人たちのあのおおらかで人の良

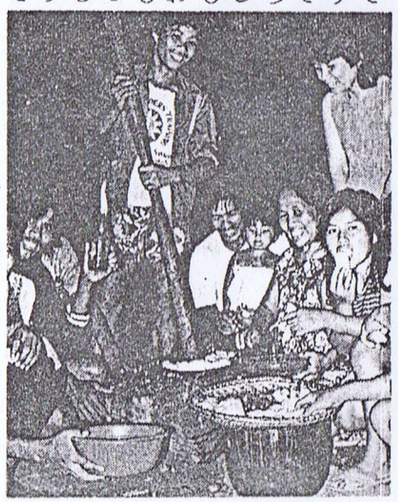
い心も失われてしまうのではないだろうか。

今回のフィリピン遠征で一番思い知らされたのは，日本人である私たちが村人の目を魅了する力はあまりにも大きいが，しかし，自然を対象としてのものから，人間と共生してゆくものとしてとらえようと訴えるには，あまりにも無力だということである。

今フィリピンの村が急速に変容するなかで，所得や財の多さでのものさしではなく，子や孫といった幾世代にもわたる永続的な価値を見いだすことが必要ではないか。それは，地域の人々の生活によってつくられる地域文化のことである。一方，異なる人間生活の間に，便利な画一的空間が拡大していくものを仮に文明と呼ぶならば，文明と文化はひとまず区別して考えねばならない。

前者を後者から分離，発展させたことによって現代社会が成り立っているといわれるように，文明の普遍性，一般性は地域文化の固有性の排除のうえに成り立っている。しかし，文明自身の内部に，行き過ぎを抑制する潜在力はなく，それをコントロールする文明と異なるものとしての文化が存在しなくてはならない。生活の便利化を伴う文明を受け入れるのは，意義のあることだが，その文明に埋没することなく，むしろ抑制を導入できる力こそ真の意味での価値ではなかろうか。その意味で，文明の画一性とは異なり文化は極めて地域的・個性的なものであり，多彩な人間活動に相応しく，地球上の各地域で多様に築き上げられてきた。そこで暮らす人々が，地域固有の文化・伝統から目をそらし，葬り去ろうとしている現在，もう一度その重要性を見つめ直し，個性的文化をつくりだす人間生活の営みに根ざして，文明と文化の接点を人間の側から押さえることが必要ではないだろうか。

と，ここまで書いてみて，どうもこれはフィリピンだけの問題ではないらしいと気付かれるだろう。自分自身の日常生活にその“価値”を当てはめてみて，その“豊かさ”について考えてみるのもおもしろそうである。



マンヤンの土地を収奪した低地民。
だが彼らも独自の文化をもっている。
もちつきならぬ，バナナつき

ボンガボン川流域の民族分布

田村康一

ミンドロ島の山岳地帯には，マンヤンと総称される，原始マレー系の焼畑農耕民が住んでいる。マンヤンは学者の調査によって，七つの文化言語集団（同じ文化と言語を共有する人々のグループ）にわけられている。それらのグループは，北から，イラヤ族，アラガン族，タジャワン族，タウブイッド族，ブヒッド族，ハヌノオ・マンヤン族，ラタグノン族の順に分布しているとされる。なおマンヤンとは，広義にはミンドロ島山地民の総称であるが，狭義にはハヌノオ・マンヤン族のことをさす。

私は一昨年，ブヒッド族の集落であるバタンガンを訪れたさいに，村人から，奥地に住むというバゴン族の話を聞かされた。バタンガンのブヒッド族によれば，「バゴン族は，ボンガボン川（現地名　Ｓａｆａ　Ｂｉｎａｇａｕ）の上流に住み，パイプで煙草を吸う習慣やねずみを食べる習慣のある原始的な連中」とのことである。

私はミンドロ島の民族分布図にものっていないバゴン族の存在に興味を抱き，ボンガボン川中流域にある，ホゴン・リゴマという集落に行ってみた。バタンガンで得た情報によると，ホゴン・リゴマの人々は，「半分がバゴン族」であるということだった。たしかにホゴン・リゴマでは，パイプで喫煙している男や，ねずみの死体をぶらさげて微笑んでいる女の子が見かけられた。しかし，当時ブヒッド語がほとんど理解できなかった自分は，英語を話さないホゴン・リゴマの人々と，ろくにコミュニケーションもできぬまま，部落を立ち去った。

それから二年がすぎた。私は再び，ミンドロ島の山岳地帯を訪れた。今回の目的は，二年前に果たせなかったバゴン族の探検である。出発前に，同じミンドロ島のハヌノオ・マンヤン族の研究者である，国立民族学博物館の宮本勝さんに，バゴン族の存在について手紙で質問をした。宮本さんによれば，バゴン族の可能性として，次のことが考えられるという。

1．ブヒッド族，もしくはタウブイッド族のサブ・グループ。
2．ブヒッド族とタウブイッドが，お互いをバゴンと呼びあっている。
3．ブヒッド，タウブイッドとは異なった文化言語集団。

3の根拠として，十数年前にポストマ神父（ハヌノオ・マンヤンの集落で，少数民族の開発プロジェクトにとりくんでいるオランダ人）が，ボンガボン川の上流で，ブヒッド語でもタウブイッド語でもない言語を話す人々と出会った，ということをあげている。ただし真相は，実際に行ってみて，言語調査をしてみなければわからないとのことであった。

そこで私は，ボンガボン川周辺に住む人々の言語を下流から上流に向かって，採録していったのである。ただし，適切なワード・リストを使っていなかった（スワデシュの基礎中核語彙を使用した）のと，駆け足の探検だったために，不備な部分がかなりあり，正確な資料とは言いがたいが，それでも大体の系統はつかむことができた。

最初に訪れたバタンガンは，前述のとおりブヒッド族の集落である。まず，バタンガンの言語をワード・リストにそって記録し，それをもとに，他の集落の言語と比較していくというのが，基本的な方針である。

ボンガボン川の支流であるシャギ川流域のシャギ，ポコイ，ヤヤグといった集落では，単独調査した大沢によると，バタンガンと同じ言語を話しているとのことであった。

ボンガボン川の本流では，ホゴン・リゴマから少し違いがみられるようになった。バタンガン等でみられるｈ音がないのである。例をあげると，Ｂｕｈｉｄ（ブヒッド）が，ｈ音が抜けてＢｕｉｄ（ブイッド）になり，ａｈｏ（わたし）がａｏになるといった具合である。（そのため，村人は，ホゴン・リゴマを，オゴン・リゴマと発音するのである）その他にも，ｍｉｙａｎｉｔ（熱い，暑い）を，ｍａｆａｌｉと言い，ｋａｍｏｔｉ（さつまいも）をｂａｉｎａｕと言うなど，いくつかの単語に違いがみられるものの，全体としては，バタンガンと同じ系統の言語であることがわかった。また，ブヒッド族固有の表音文字も，バタンガン，ホゴン・リゴマに共通してみられた。

ホゴン・リゴマから，さらに上流へ遡った，アリット，ファワ，ギニヤン（いずれもボンガボン川の支流の名）などの人々も，ホゴン・リゴマと同じ，ｈ音のない言語グループで，同じ表音文字を有していた。なお，アリットから上流は，バタンガンやホゴン・リゴマのようなまとまった集落はみられず，広範囲にひろがった数十軒の散在集落が，一つのコミュニティを形成している。また，パイプで煙草を吸う習慣も，それらの地域の人々のあいだに，広くみられた。

以上のことから，バタンガン，シャギ，ポコイ，ヤヤグは，ブヒッド族の居住区域で，バタンガンの住民がバゴンと呼んでいた，ホゴン・リゴマ，アリット，ファワ，ギニヤンなどの人々は，厳密にいえば，そのサブ・グループであるブイッド族だと考えてよさそうである。

ところで，ギニヤン川との分岐点より上流で出会った，耳に安全ピンをさした人々は，それらのブヒッド族やブイッド族とは，全く異なった言語を話しており，文字は持っていなかった。ガイドのネストーロ（ブヒッド族）は，「こいつらもバゴン族だ」と言ったが，彼らは自らをタウブイッド（山の人）と名のった。タウブイッド族の言語資料がなく，私が採録した言語と比較できないので，断定はできないが，そこらあたりから，タウブイッド族の居住地域に入ったと考えてよいのではないだろうか。　また，タウブイッド族と奥地のブイッド族は，ボンガボン川を交路としてお互いに頻繁に行き来しており，両者間の交易や通婚もおこなわれているようだった。

バタンガンのブヒッド族は，バゴン族の定義として，パイプによる喫煙と，ねずみ食いをあげていたが，こうして考えてみると，奥地のブイッド族が煙草を吸うのは，タウブイッド族との交易による影響であり，（タウブイッド族には喫煙の習慣がある）ねずみを食べるというのは，食料事情の悪さによるものではないか。バタンガンには二十年ほど前から学校や教会があり，それらの影響で，「ねずみを食べることは恥ずかしい」と考えるようになったのだろう。事実ブヒッド族のあいだには，ねずみを食べることに対するタブーは存在せず，食料が欠乏したときには，彼らだって食べるのだ。

以上のことから考察すると，バゴン族とはミンドロ島の奥地で，文明の影響を受けずに伝統的な生活を守っている，ブイッド族やタウブイッド族のことで，独立した文化言語集団としてのバゴン族は，存在しないということがいえるのではないだろうか。ホゴン・リゴマでは，バタンガンのブヒッド族のことを“バラバン”（低地の人）と呼んでいたが，これは，奥地の人という意味である“バゴン”に対応するもので，“バラバン”も“バゴン”も，ある特定の民族をさしたものではないのだろう。ただし，これはあくまで私個人の見解であり，他の隊員の考えは違っているかもしれないということを，付け加えておく。

ところで，ポストマ神父が出会ったという，ブヒッド語でもタウブイッド語でもない言葉を話す人々の正体とは，一体なんだったのだろう。

私は帰国後，ミンドロ島のタジャワン族の研究をおこなっている立教大学の小幡壮さんに会いにいった。小幡さんによれば，奥地のタジャワン族が，アグロバン川から，ボンガボン川の上流付近までやってくることがあるそうだ。ポストマ神父が出会った人々というのは，そのタジャワン族であるかもしれない，というのである。たしかにそう考えれば，うまく辻つまがあうのだが，やはり私は，バゴンでもタジャワンでもない，まったく別の民族が，ミンドロ島の山奥のどこかに存在すると，信じたいのである。なぜなら，それは探検部員である私の，ささやかなロマンなのだから。

〔参考文献〕

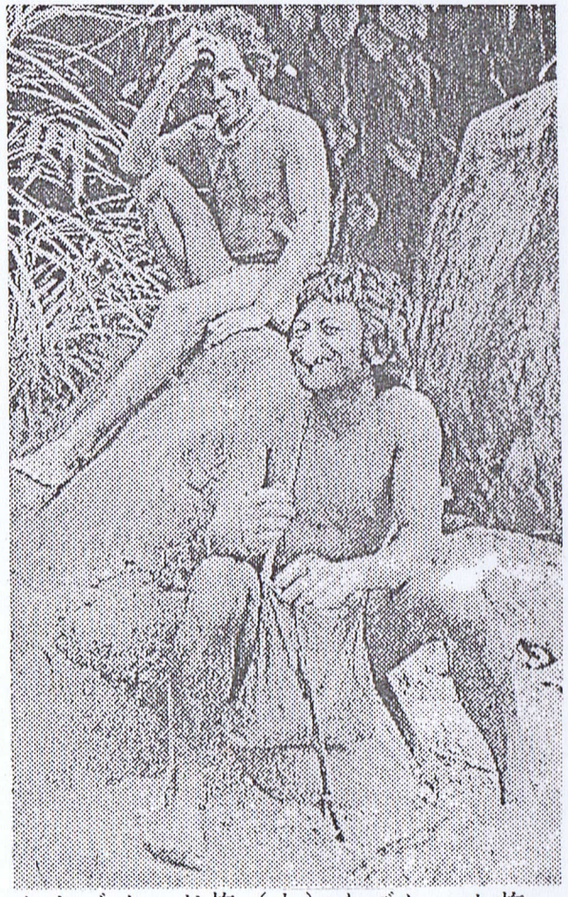
菊池靖『フィリピンの社会人類学』１９８０，敬文堂

宮本勝『ハヌノオ・マンヤン族』　１９８６，第一書房

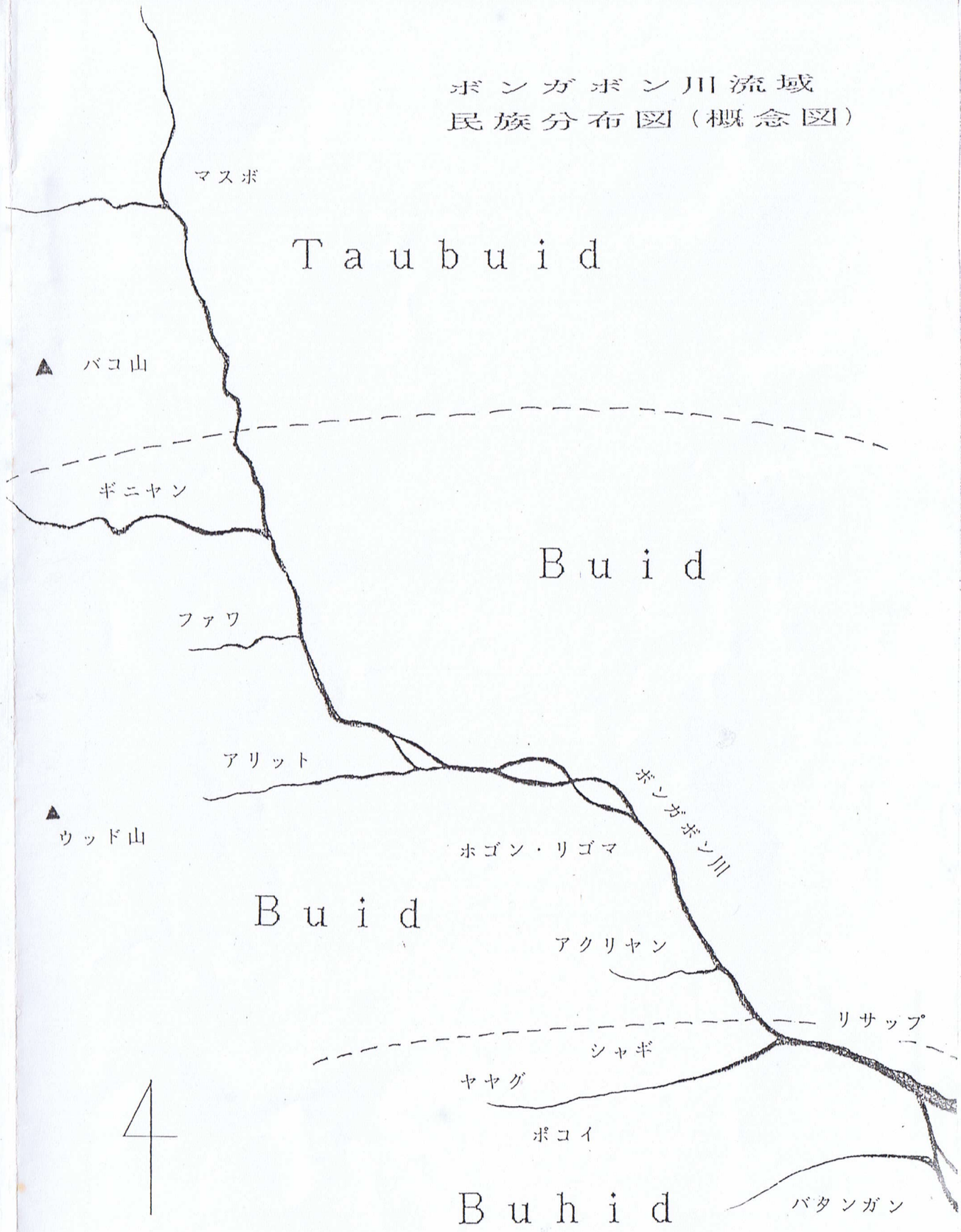
Violeta Lopez Gonzaga1983
PEASANTS IN THE HILLS
AU. P. Diamond Jubilee Publication

(a)	(i, e)	(u, o)
(ba)	(bi, be)	(bu, bo)
(ka)	(ki, ke)	(ku, ko)
(da)	(di, de)	(du, do)
(ga)	(gi, ge)	(gu, go)
(ha)	(hi, he)	(hu, ho)
(la)	(li, le)	(lu, lo)
(ma)	(mi,me)	(mu, mo)
(na)	(ni, ne)	(nu, no)
(ŋa)	(ŋi, ŋe)	(ŋu, ŋo)
(pa)	(pi, pe)	(pu, po)
(ra)	(ri, re)	(ru, ro)
(sa)	(si, se)	(su, so)
(ta)	(ti, te)	(tu, to)
(wa)	(wi, we)	(wu, wo)
(ya)	(yi, ye)	(yu, yo)

マンヤン文字のアルファベット



タウブイッド族（上）とブヒット族。
彼らは義兄弟



4

―― 旅の終わりに ――

この小冊子は，横浜市立大学探検部の「ミンドロ島遠征８７」の探検報告書である。当初の予定では，今年の７月までに報告書をまとめるはずだったのだが，編集責任者である私の怠慢で，延び延びになっていたのだ。

探検報告書，といっても，事前に一貫した編集方針もたてず，隊員のひとりひとりに，一番印象にのこったことや，関心のあることについて，自由に原稿を書いてもらうことにした。探検部員は，あらかじめ決められたワクのなかでは，充分な力を発揮できない傾向があるので，あえて役割を分担しなかったのである。その結果，このように雑多な内容が入りまじったものになってしまったが，隊員それぞれの感性が自由に表現されていて，紋切りがたの報告書をつくるよりも，かえっておもしろかったのではないだろうか。

私たちの探検は，客観的な事実の発見よりも，探検の行為者である自分たち自身の自己満足を追求することを，その目的とするものだ。大学の同級生たちが，勉強に，スポーツに，恋にと，青春をおう歌しているときに，時代錯誤の探検なんかに夢中になって，あいつらはバカじゃなかろうかと思われるむきもあるかもしれないが，バカにはバカなりの論理というものがある。

私にとって，ミンドロ島のジャングルをバゴン族もとめてつきすすむことは，ギャルとテニスで戯れることよりも価値のあることであり，また，今回の探検を通じて知りあった，さまざまな人々から教えられたことは，大学の講義なんかよりも，よっぽどためになることなのだ。ようするに個人にとっての価値観の問題なのである。

そういったわけでこの報告書は，客観的な事実の記述よりも，個人の主観的な体験を中心として，書かれているのである。

客観的な発見を伴った，地球的規模での探検時代はもはや終わりをつげてしまったが，個人のレベルでの探検の対象は，私たちのまわりにいくらでも存在する。この『ミンドロ島遠征８７』は，そういった主観主義時代の探検の，ひとつの記録なのである。

１９８７年１１月３日　田村康一

参考人献 ――お世話になった方々へ

この探検はもちろん，私たち五人の力だけでできたのではありません。多くの人々のご理解と，ご協力のおかげで実現することができました。普通，こういう欄には，研究機関やお役所の名前が真っ先にならびますが，私たちの場合はまず第一に，なんといってもフィリピンミンドロ島の住民たち，をあげなければなりません。彼らは，金持ち国ニッポンからやってきた大学生の気まぐれな行為を，おおらかな心で快く（？）受け入れてくれました。家や食べ物を提供し，奥地を案内してくれたブヒッド族の人々だけでなく，そこでボランティアをしていたアメリカ人や，入植者の人々にも，貴重な情報を頂いたり，水牛に乗せてもらったりしました。この報告書をつくることができたのも，彼らの協力によるところが大であります。こんなところに書いても，彼らには伝わるはずもありませんが，ここに感謝の意を表し，この小冊子を彼らに捧げます。

後援　（資金援助，救援体制）

横浜市立大学探査会　事務局長　高松康夫氏

（フィルム提供，現地情報，記事掲載）

朝日新聞社　横浜支局，マニラ支局長　原井清隆氏

提供　（ミンドロ島五万図）

ＡＬＭＥＣ　マニラオフィス　岩田氏，熊沢氏

協力　（民族学指導）

天理大附天理参考館　日本民俗室　紙村徹氏

国立民族学博物館　第二研究部　宮本勝氏

立教大学　アジア地域研究所　小幡壮氏

（新聞社仲介，記事掲載）

横浜市立大学講師，曙光新聞編集長　影山三郎氏

（フィリピン国立博物館紹介）

高知大学海洋生物教育センター　大野正夫氏

（水質調査器具提供）

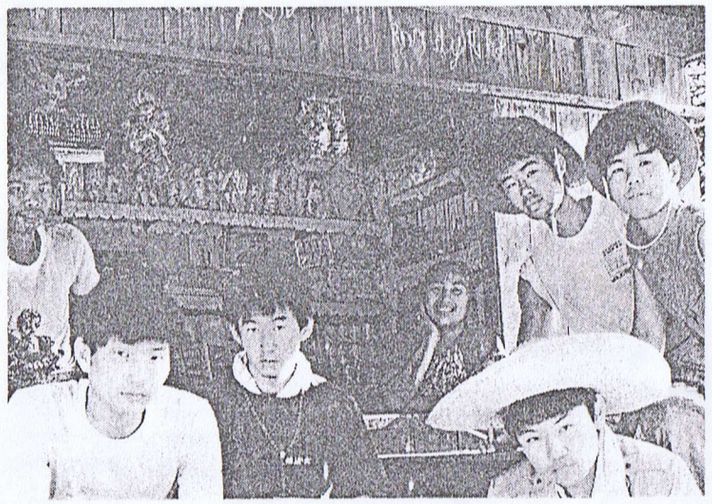
横浜市水道局水質試験所　磯村康博氏

（医療指導）

日本検疫衛生協会　横浜診療所

許可　（民族調査許可）
フィリピン国立博物館　植物部長　P．A．Cordero氏

以上，順不同。ありがとうございました。（大槻英二）



探検隊の勇士たち。サリサリストアーの前で

ミンドロ島遠征８７報告書

１９８７年１１月５日発行　　定価五百円

著者　大槻英二　高梨洋之　田村康一
小嶋健太　大沢啓志

編集者　田村康一

印刷製本　田村康一　高梨洋之

発行所　横浜市立大学探検部
〒２３６　横浜市金沢区瀬戸２２－２